

長岡京市文化財調査報告書

第 31 冊

1993

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 31 冊

1993

長岡京市教育委員会

序 文

「愛と感動の物語」と銘打ち、“長岡京ガラシャ祭”が昨年11月14・15日、盛大に行われました。この祭りは、「勝竜寺城公園」の完成を記念し、約4百年前に明智光秀の娘「玉」（後の細川ガラシャ夫人）が勝龍寺城の細川忠興のもとに嫁ぐ興入れ行列と婚礼の儀を再現するものでした。

クラリネットやドラなどを賑やかに奏でる南蛮の人たちを先頭に、当時の衣装にふんした「玉」などの興入れ行列、その後に繼体天皇など本市ゆかりの人物の歴史文化行列、マーチングバンドなどの町衆祝い行列の総勢約500人が続き、全長2.7キロメートルに華やかな時代絵巻が繰り広げられました。沿道には12万人が詰めかけ、本市始まって以来という大イベントになりました。

この祭は5年前に行われた市民からのアイデア募集で実現したもので、市民参加で運営され、行列の配役も市民募集で行われました。今後、この祭がさらに市民が主人公となった、名実ともに現代に生きる市民の「愛と感動の物語」になることを期待するとともに、勝龍寺城の歴史解明、城にまつわる遺跡の保存と整備に力を注いでいく所存でございます。

ここに刊行いたします報告書は、平成4年度中に教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかに関する発掘調査の成果であります。とくに長岡京跡では「金銀帳」の木簡などが確認され、長岡京の西市跡を推定していく上で貴重な成果が得られました。

これらの成果が本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに、市民の歴史学習資料として広く活用していただけることと期待しています。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方並びに関係機関、また、発掘調査にご理解とご協力を賜りました土地所有者の方々に、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

長岡京市教育委員会

教育長 中小路 倭

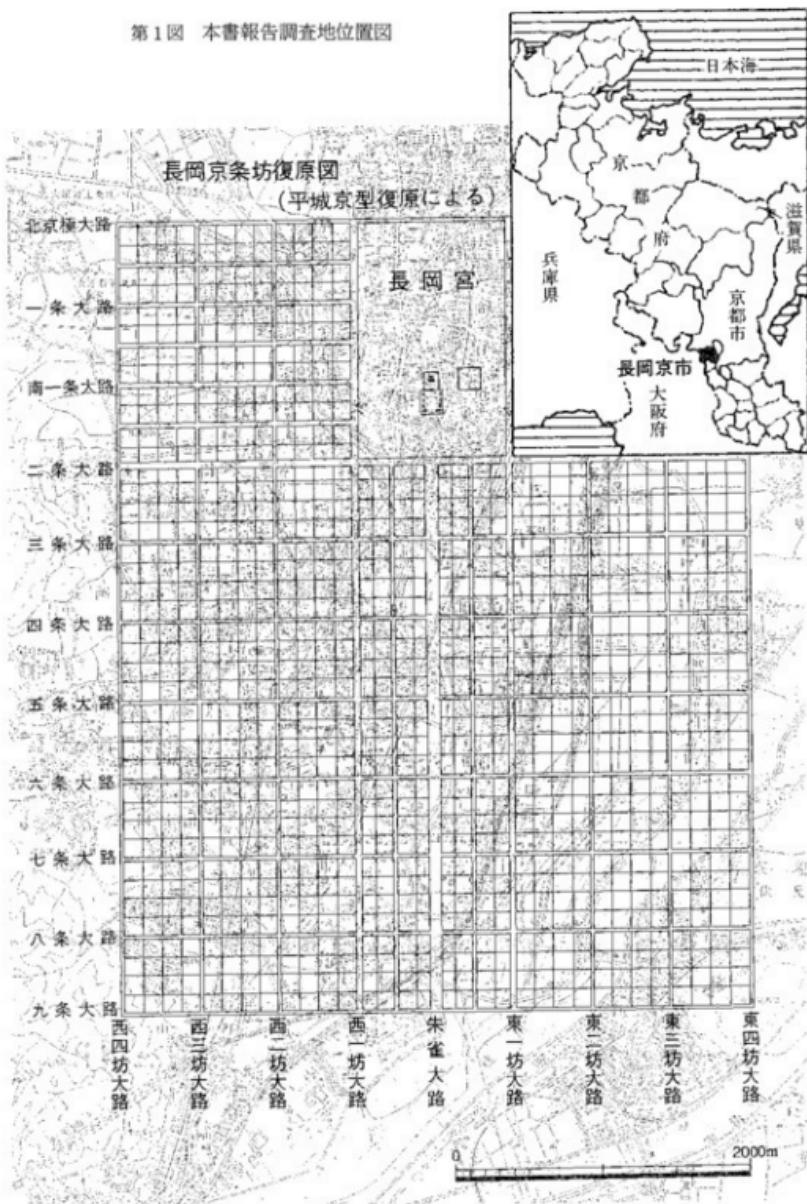
凡 例

1. 本冊は平成4年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。
 2. 上記の調査地は付表一のとおりである。その位置は第1図に示した。
 3. 長岡京跡の調査次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』昭和52年)による小字名をもとにした地区割に従った。
 4. 長岡京跡の条坊名は山中 章ほか「第126回長岡京条坊図」(向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 1982年)による呼称に従った。
 5. 各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。
 6. 本書の編集は長岡京市教育委員会文化スポーツ課文化財係中尾秀正が行った。
 7. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、下記の方々のご協力を得た。
また、図面トレースの一部は財団法人長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏に、遺物写真撮影の一部は写房楠華堂 楠本真紀子氏にそれぞれご協力を得た。
- (技術補佐員) 坂根 瞬
- (調査作業員) 岩岸三郎・中村正雄・麻田安太郎・井本千代治・佐藤昭三・平木秋夫・堤昭治・高瀬嘉一郎・田頭道登・前田 正・天野菊次郎
- (調査補助員・整理員) 岩川鉢子・石田滋子・奥野久美子・太田美枝子・小畠鉢子・尾崎みづ樹・金子直美・久保直子・久米佐知子・坂根 巧・鈴木英美子・田中智紀・田中京子・月本一武・天白真理子・橋田邦夫・船戸裕子・三間千津・森 昌彦

付表1 本書報告調査一覧表

調査次數	地区名	所在地	土地所有者	調査期間(現地)	調査面積	備考
長岡京跡 右京第410次調査	7ANKHT-4	長岡京市 開田四丁目717-1	大久保重夫	1992. 8.17~10.7	263m ²	開田遺跡
長岡京跡 右京第413次調査	7ANMS I-12	長岡京市 開田四丁目405	藤井博一	1992. 11.17~12.28	280m ²	開田遺跡

第1図 本書報告調査地位置図



本 文 目 次

序 文	i
凡 例	ii
第 1 章 長岡京跡右京第410次調査概要	1
1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	
第 2 章 長岡京跡右京第413次調査概要	19
1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 まとめ	

図 版 目 次

長岡京跡右京第410次（7 A N K H T - 4 地区）調査

- | | | |
|------|-------------------------|----------------------------|
| 図版 1 | 1 1 トレンチ長岡京期拡張前(西から) | 2 1 トレンチ長岡京期拡張部(東から) |
| 図版 2 | 1 1 トレンチ溝 S D41005(南から) | 2 1 トレンチ溝 S D41005断面(南から) |
| 図版 3 | 1 2 トレンチ全景(東から) | 2 2 トレンチ自然流路 S D41009(西から) |
| | 3 1 トレンチ断割り断面(北から) | 4 1 トレンチ西拡張区の足跡(東から) |
| | 5 足跡の検出状況(東から) | |
| 図版 4 | 出土遺物－1 | |
| 図版 5 | 出土遺物－2 | |
| 図版 6 | 出土遺物－3 | |
| 図版 7 | 出土遺物－4 | |
| 図版 8 | 出土遺物－5 | |

長岡京跡右京第413次（7 A N M S I -12地区）調査

- | | | |
|------|---|-------------------|
| 図版 9 | 調査地全景（西から勝龍寺城方向を望む） | |
| 図版10 | 1 調査地全景(北から) | 2 調査地全景(南から) |
| 図版11 | 1 堀立柱建物 S B41318(西から) | 2 堀 S D41305(西から) |
| 図版12 | 1 槛状建物 S B41317ほか(東から) | |
| | 2 槛状建物 S B41317の柱穴 (1 - P79, 2 - P95, 3 - P80, 4 - P84) | |

挿 図 目 次

第1図 本書報告地位置図 iii

長岡京跡右京第410次（7ANKHT-4地区）調査

第2図	発掘調査地位置図（1/5000）	1
第3図	トレンチ配置図（1/300）	3
第4図	1トレンチ検出遺構図（1/150）	4
第5図	溝S D41005平・断面図（1/60）	5
第6図	2トレンチ検出遺構図（1/150）	6
第7図	溝S D41005出土遺物実測図1（1/4）	9
第8図	溝S D41005出土遺物実測図2（1/4）	10
第9図	溝S D41005ほか出土遺物実測図3（1/4・1/2）	11
第10図	溝S D41005出土遺物実測図4（1/3）	12
第11図	溝S D41005出土遺物実測図5（1/3）	13
第12図	流路堆積出土遺物実測図（1/4・1/3）	14
第13図	出土石斧実測図（1/3）	16
第14図	右京六条二坊七町と調査地	17

長岡京跡右京第413次（7ANMSI-12地区）調査

第15図	発掘調査地位置図（1/5000）	19
第16図	調査地南壁・東壁土層図（1/100）	20
第17図	長岡京期検出遺構図（1/600）	21
第18図	掘立柱建物S B41318実測図（1/60）	22
第19図	検出遺構図（1/100）	23
第20図	堀S D41305土層図（1/50）	25
第21図	堀S D41305の断面（東から）	25
第22図	井戸S E41301（北から）	26
第23図	井戸S E41301実測図（1/40）	26
第24図	土壤S K41312（北東から）	27

第25図	土壤 S K 41304 (東から)	27
第26図	槽状建物 S B 41317実測図 (1/40)	28

付 表 目 次

付表 1	本書報告調査一覧表	ii
------	-----------	----

第1章 長岡京跡右京第410次調査（7ANKHT-4地区）調査概要

——長岡京跡右京六条二坊七町・開田遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、1992年8月17日から10月7日まで、長岡京市開田四丁目717-1において実施した長岡京跡右京六条二坊七町および開田遺跡に関するものである。調査面積は1トレンチ177m²、2トレンチ86m²の総計263m²である。
- 2 本調査は、調査地周辺に存在が推定されている長岡京の「西市」に関する資料を得ることを主な目的として実施した調査である。
- 3 調査は平成4年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となって実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者の大久保重夫氏をはじめ、水道の借用をお願いした中村正雄氏、富藤敏男氏など周辺の水田所有者、近隣住民に数々のご援助をいただいた。
- 5 調査後の図面・遺物整理には橋田邦夫・船戸裕子をはじめ多くの方々の協力を得た。
- 6 本報告の執筆および編集は小田桐が行なった。



2 調査経過

2 調査経過

今回の調査地は、阪急長岡天神駅とJR神足駅のほぼ中間に位置し、長岡京市内を南流する犬川西隣りにある。このあたりは日下雅義氏の地形分類によると犬川の後背低地にあたるところで、調査対象地の東西に細長い3枚の水田面は犬川に向かって低くなっている。長岡京の条坊復原によると長岡京跡右京六条二坊七町の宅地内にあたっており、長岡京跡はもちろん開田遺跡にも含まれる地域である。

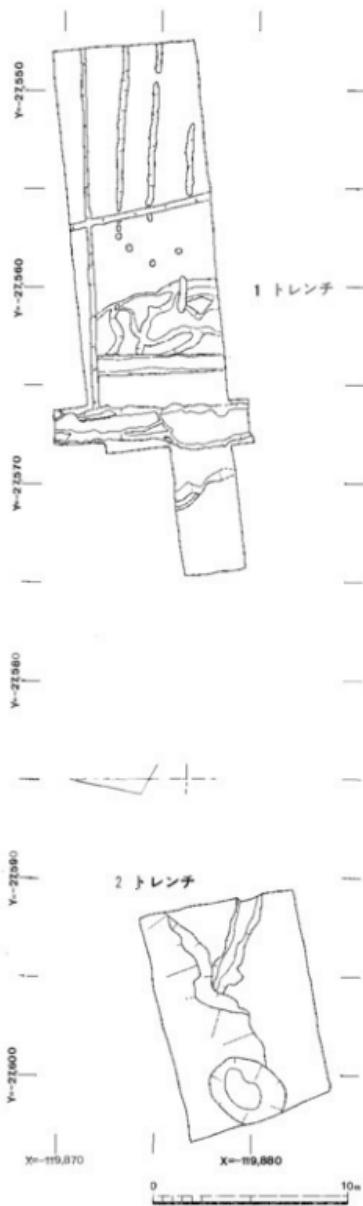
当地周辺での国庫補助事業による調査は、これまでに右京第364次調査⁽¹⁾・右京第385次調査⁽²⁾が行なわれており、今回が3回目となる。この一連の調査は長岡京の推定西市北西部にあたるため、その所在の有無を確認するために行なっているもので、これまでの調査で西二坊坊間小路の西側溝や右京六条二坊六町内の掘立柱建物・井戸などが確認されている。

調査トレンチは3枚の東へ順次低くなる水田区画のうち、東に第1トレンチ、西に第2トレンチを設定し、中央は土置き場とした(第3図)。調査の結果、流路堆積の上に長岡京の生活面が存在することが判明した。以下各トレンチごとに調査過程を概述する。

1 トレンチ 水田耕作土・床土を除去すると中世遺物を包含する薄い層が二層ないし四層堆積していた。これらの層は粘質土層であるが、粘質土層中にも部分的に砂層が入るなど何度か氾濫があったものと考えられる(第4図3~6層)。また4層は黄褐色土が混入しており、さらにいずれの層にも中世を中心とする土器の細片が多く混入していることから、これらの層が耕作されていた層である可能性が高い。

これらの層を除去するとトレンチ中央部から南東へ傾斜する面になり、この面から長岡京期の遺構が検出された。検出面のレベルは高い所で海拔16.9mほどである。検出遺構は長岡京期の南北溝2条(S D41001・05)と東西溝3条(S D41002~04)である。S D41001とS D41005のベースはこの付近に薄く堆積している砂層(第4図7層)である。この砂層の上部には小礫が多く、礫とともに長岡京期の土器が出土している。他にはSX41006の西部で牛の足跡が多數検出された。層位的には長岡京期よりは新しくならないものである。SX41006およびSX41007は淡黒灰色シルトの堆積で、長岡京以前の流路堆積最上層である。以下の層は断割りによって確認したが、粘砂層と砂礫層が深く、全面流路内による堆積状況であった。遺物は主に砂礫層から縄文時代・弥生時代・古墳時代の土器が出土している。

2 トレンチ 耕作土・床土を除去すると、1トレンチの長岡京期に対応する面になる。しかし長岡京期の遺構は全く認められず、下層の流路の変遷が堆積によって確認された。S D41008は1トレンチSX41006・07と同様の堆積で、一時的な自然の流れであると考えられる。また流路のある時期の南肩が検出された(S D41009)。しかしこの流路の肩になっている層も砂礫層で全体的に流路の中の状況である。中から縄文時代・弥生時代の土器が出土している。



第3図 トレンチ配置図 (1/300)

3 検出遺構

今回の調査によって検出された遺構は、長岡京期と考えられ溝が5条とその下層に堆積する弥生時代から古墳時代の自然流路である。

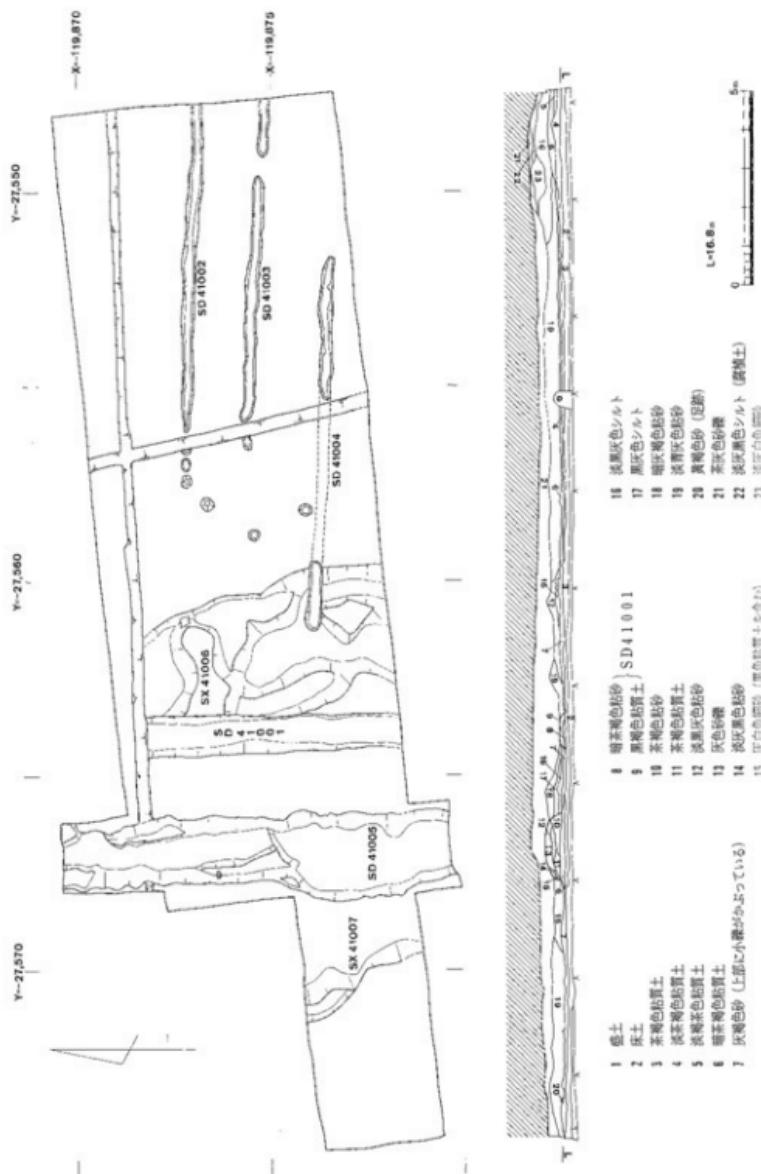
(1) 1トレンチ

溝SD41001 幅1m、深さ0.15mほど南北溝。トレンチ北端ではベースが軟弱な粘砂層となり、検出できなかった。埋土は暗茶褐色粘砂層と黒褐色粘質土層の2層から埋まっている。

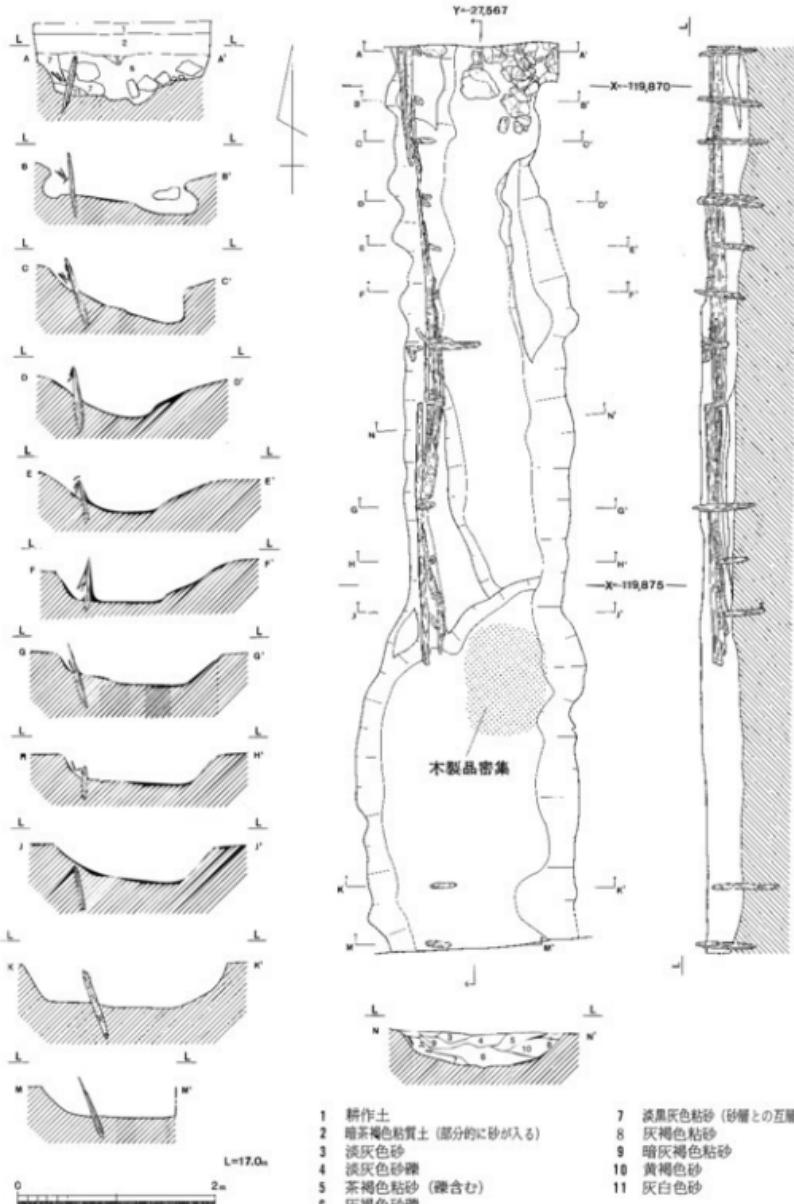
遺物は土師器、須恵器片が数点出土したのみであるが、おおむね長岡京期のものとしてとらえられる。座標はY=-27,564である。

溝SD41002~04 幅25cmほどで、深さ0.1~0.15mの細い溝である。トレンチ中央部の平坦なところでは、溝は非常に浅く終わるが、トレンチ東部の傾斜している部分では、斜面に沿って溝が掘られている。いずれの溝も西で北に2度30分振れている。遺物は非常に少ないので、時期判定可能な土器としてSD41004から第9図54の土師器环が1点出土しており、この溝群は長岡京期頃のものと考えた。埋土は東の斜面の方では若干異なるものの、西端部ではSD411001と全く同様の色調で本来SD41001とながっていたものとしてとらえることができる。

溝SD41005 当初あけたトレンチの西端で若干東肩が検出されていた。しかし砂のベースに砂の埋土であったため、長岡京期の全景写真終了後にトレンチを西へ拡張して検出された南北溝である。幅1.7m、深さ0.3mから0.5mでSD41001とは1.6m隔てている。埋土は砂層と粘質土層との互層からなっており、かなりの流水があったようである。溝の西肩には側板に

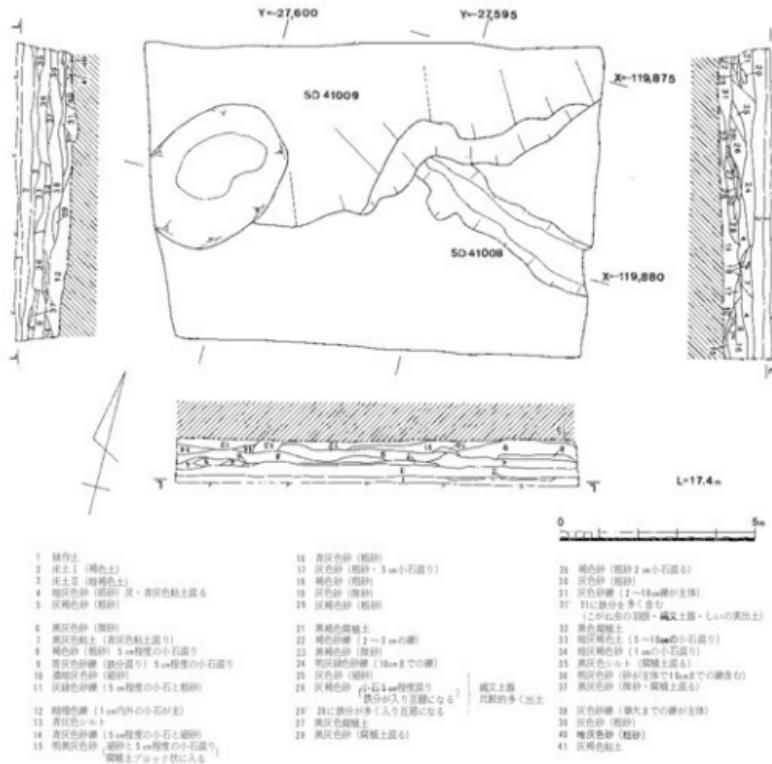


第4図 1トレンチ検出構造図 (1/150)



第5図 溝SD41005平・断面図 (1/60)

6 検出遺構



第6図 2トレンチ検出遺構図 (1/150)

による土留めの施設が施されている。この施設は長さ2.6m幅12~15cm厚さ1cmの板材を、長さ50~73cm太さ5cm前後の丸太材ないしは縦割り材の杭によって止めているもの(図版8・121)で、杭の間隔は0.4~0.5m、側板は多いところで4枚ほど重ね合わせてあった。溝の南端部では側板はないが、杭が2本残っていることからさらに南にも続いていたものであろう。なお、北端部東肩の抉れたところには礫が放り込まれている。この溝の中からは木簡をはじめ多くの長岡京期の遺物が出土している。座標はY=-27,567である。

(2) 2トレンチ

自然流路SD41009 トレンチ全体が流路の堆積であるが、一時期の南肩が検出された。埋土は砂層が主体となっている。深さ1mまで調査したが、湧水と壁面崩落の危険性のため以下の調査を断念した。遺物は少ないが、ほとんどが縄文土器である。しかしこの流路堆積より古い層から1点であるが弥生土器の底部が出土していることから、流路の時期はもっと新しく

なる。

4 出土遺物

今回の調査で出土している遺物は、大別して中世包含層出土遺物と長岡京期の遺構出土遺物、長岡京期より下層の流路堆積出土遺物に分けられる。中世遺物包含層出土の遺物は瓦器や土師器の細片がほとんどであるが、第9図に須恵器壺把手(55)と埴輪片(56)、石製鉗具(57)を掲載した。55はおそらくは長岡京期と考えられるもので、56は調査地の北70mに所在する塙本古墳と同種の円筒埴輪片である。これらは1トレンチから出土した。57は2トレンチの中世堆積層から出土している小型の石鉗(丸鉗)で、裏面には穿孔しようとした跡が4ヶ所認められるが潜り穴となっておらず、未製品と考えられる。同じ層から北宋錢「治平元寶」も1枚出土している。

長岡京期の遺構出土遺物はそのほとんどが1トレンチのSD41005出土であるが、それ以外では第9図54の土師器壺がSD41004から出土したものである。これはC手法による外面調整で口縁端部が内面に肥厚する長岡京期の特徴を備えた土器である。

(1) 溝SD41005出土遺物(第7~9図1~53・58、第10・11図)

SD41005からは大量の土器と木製品が出土した。溝の埋土は複数層あるが、次の三層に大別される。A.溝の流れが多く、砂と粘質土が互層となって堆積した部分。ほとんどがこれにあたる。第5図断面3~6・8~10層。B.溝底の堆積で、Aによってかろうじて一部分残存していた木製品・有機質を大量に含んだ粘質土。第5図の網掛け部分。C.側板の裏側の堆積で粘質土。遺物はさほど多くはないが、溝の初期の堆積土と考えられる。第5図断面7・11層。

土器類

Aからは土器類のほとんどが出土している。図示した土器は全てこの堆積出土のものである。種類は土師器・須恵器・黒色土器・製塙土器・土馬などの土製品で、須恵器と土師器が大半を占める。破片は小片が多い中に半分くらいの大振りのものが混じる傾向にあり、あまり接合しない。捨てられたところから若干流されていると思われる。ただし、13・14・34・37は割れた破片が狭い範囲から一緒に出土しており、すぐ近くから投棄されたものとみることができる。

須恵器

壺類 壺Aは1・2がある。破片数は数片程度であり量は少ない。壺Bは7~10で須恵器の中では一番多く出土している。大きさは図示したものがほとんどで、これより大きい口径の破片が若干ある程度である。底部外面に墨書したものがある。9は「・□器」と書かれており、用途もしくは所有を記したものであろう。10は「二」の数字が1字書かれている。同じ文字が須恵器蓋にもあるが、この蓋とは口径が合わない。底部のみで体部を打ち欠いており、内面を硯として転用している。8は全容は不明であるが、「大」かと考えられる文字を墨書した後同

8 出土遺物

様の字を線刻しているものである。

蓋類 3は壺Aの蓋で、肩はなだらかなカーブで屈曲する。外面には薄く自然釉が付着している。4～6は壺Bの蓋で、5は10と同様外面に「二」の墨書があり、内面は硯に使用されている。壺蓋の破片数も壺Bと同様に高い比率を占めている。

壺類 壺Hは13～15が出土した。13・14は小型形態のもので、淡灰白色の甘い焼きで二個体同じ所で出土した。13はほぼ完形である。底部はヘラおこしされている。16は壺L、17は壺Gである。18の壺底部には糸切り痕が残っている。他に壺Mや壺の把手部分（図版4・118）などの破片も出土している。

その他 11は壺ないし蓋の破片で、文字が2文字墨書されている。意味は不明である。12は壺の底部と思われる破片で、「①」の記号が墨書されている。

土師器

皿類 皿Aは23～27を図示した。破片は他に多数出土している。23は底部指おさえ、体部横なでで調整されている。特に口縁部は強くなでられている。端部内面は肥厚せず、外反ぎみに丸く仕上げられている。他はc手法ないし口縁端部を若干削り残すc'手法のものである。26と27の外面には線刻による記号が刻まれている。31は皿Cである。体部は強くなでられて外反している。3分の1強の破片であるが、端部に2ヶ所煤が付着しており、灯明皿に使用されたものである。

蓋類 蓋は28～30を図示した。28は上面に線刻がされている。30はつまみ上面に墨書されているものである。この蓋の内面は全面墨が付着している。

椀類 17・18は椀A、19は椀Cである。19の底部外面には「(岡)」の墨書が1字書かれている。

甕類 甕の破片も多く出土している。47～51の小型形態と52・53の大型に分けられる。51の体部内面下半には当て具痕跡が認められる。

その他では、高壺は37～39を図示した。37は壺部がほぼ完形に接合している。高壺は他に数個体の破片が出土しており、他地点の出土比率と比較して多い傾向にある。

墨書人面土器は40～42である。小片ばかりで接合するものはない。

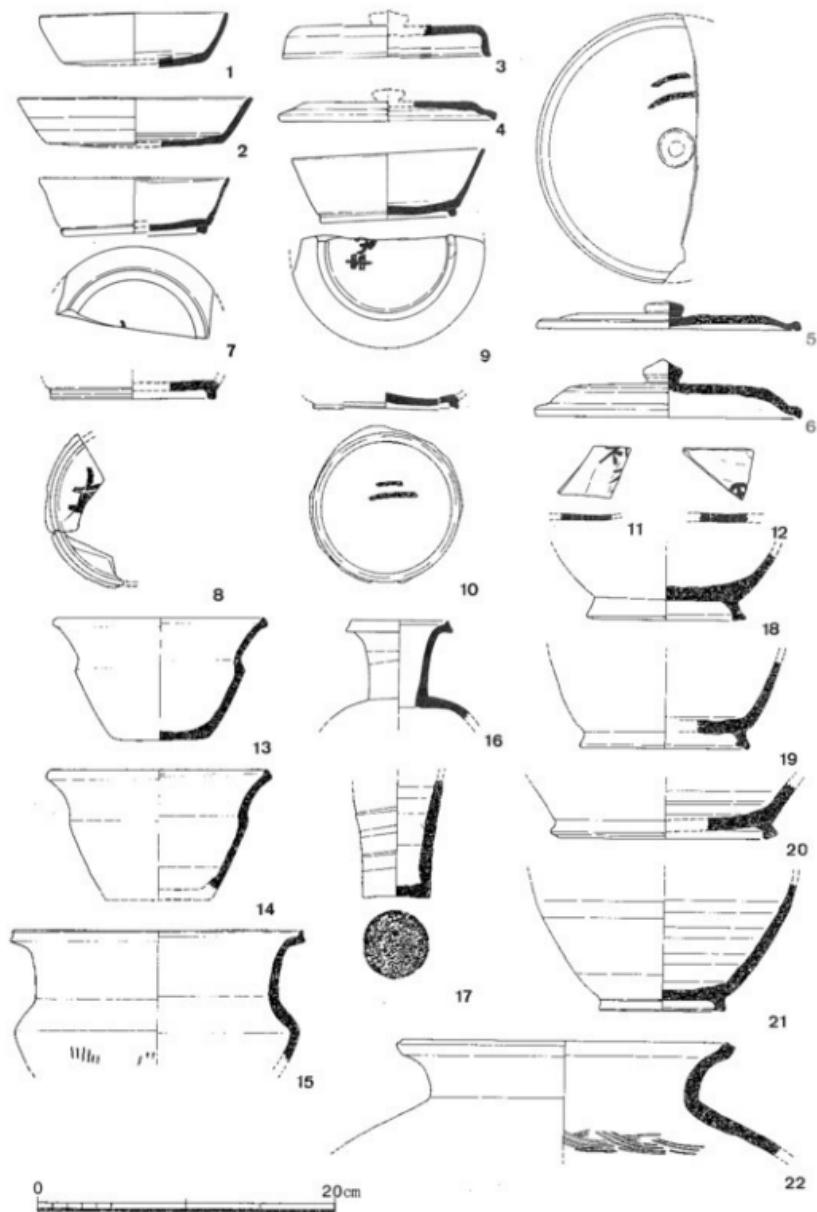
土馬は44～46がある。他にも数片出土しているが、全て小片で図示した以上に大きな破片はない。

石製品

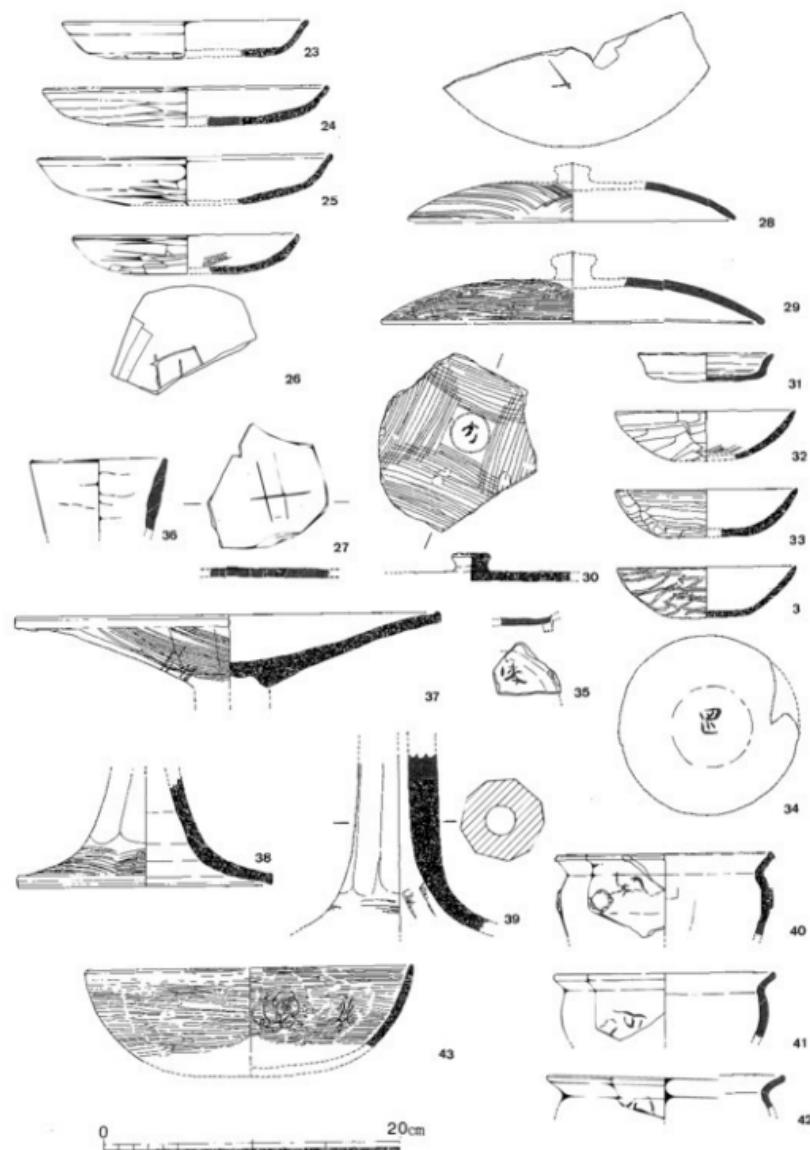
58は(3)の堆積から出土した石斧(丸柄)で、裏面のもぐり穴の2ヶ所には帶にとじ付けた銅線が残存している。

木製品

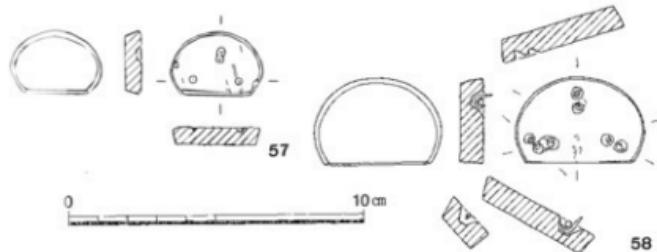
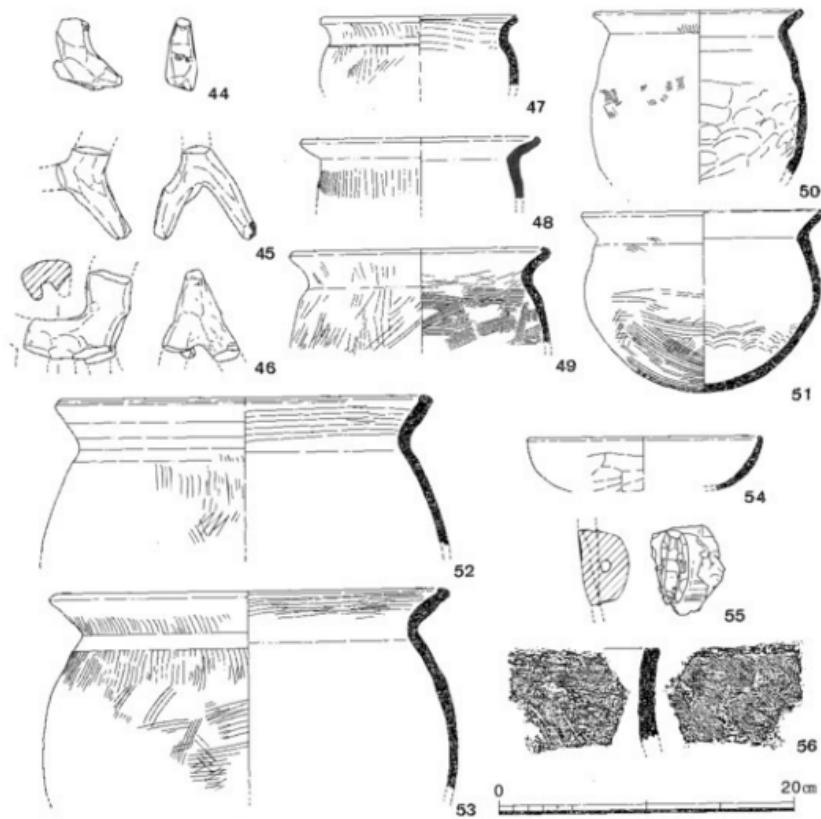
図示した木製品は63がCで出土したほかは全てBの堆積から出土したものである。種類には木簡、人形や斎串などの祭祀遺物、杳、箸や匙などが出土している。



第7図 溝S D41005出土遺物実測図1 (1/4)

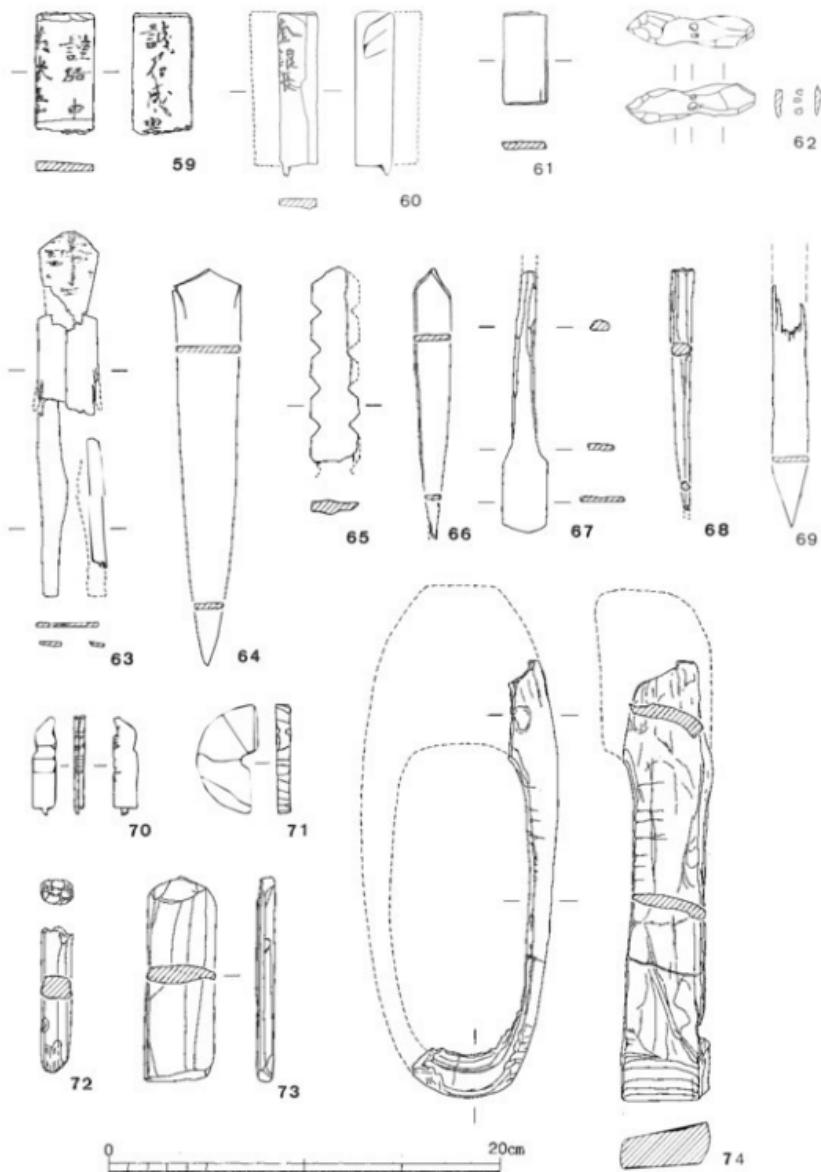


第8図 满SD41005出土遺物実測図 (1/4)

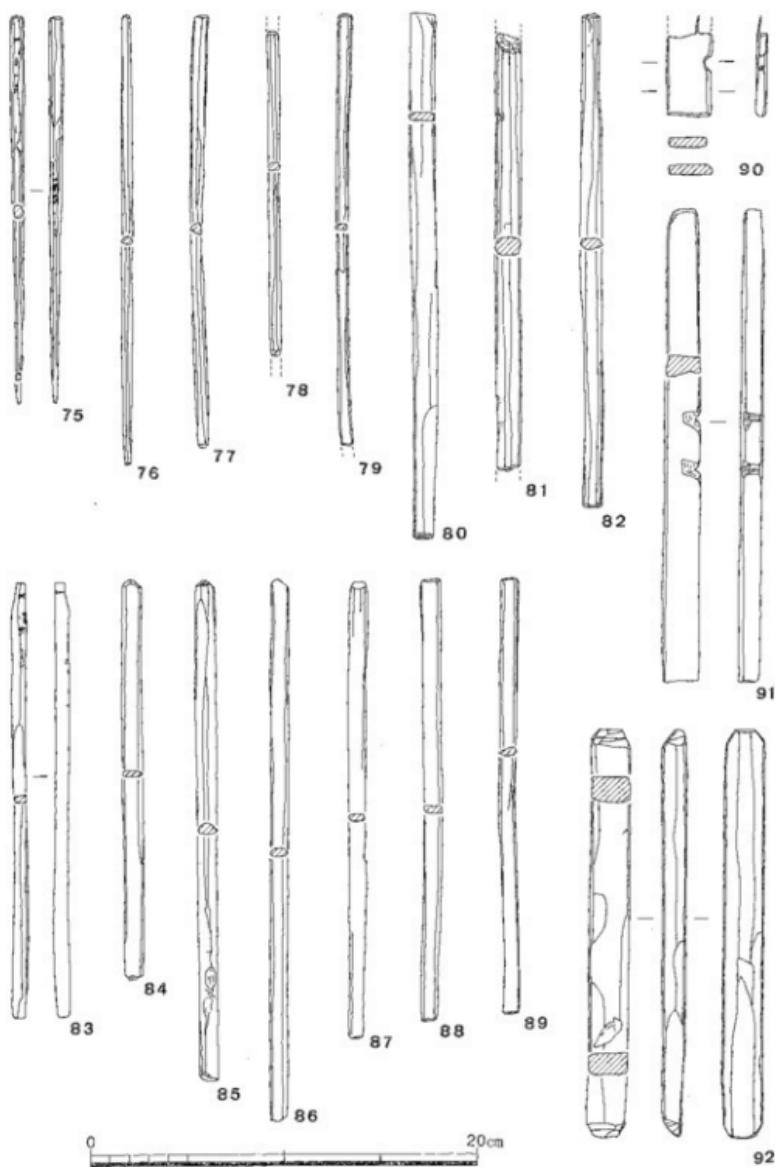


第9図 溝S D41005・その他出土遺物実測図3 (1/4・1/2)

12 出土遺物



第10図 溝S D41005出土遺物実測図 4 (1/3)



第11図 満S D41005出土遺物実測図 5 (1/3)

14 出土遺物



第12図 流路堆積出土遺物実測図 (1/4・1/3)

木簡 59は文書様木簡の断片で、上下は切り取られ、左端は割れている。文字は表に2行、裏に1行書かれている。表には「謹啓 申×」「右米五斗×」、裏には「誠石成米×」と書かれている。裏の「米」は上3文字とは若干左にずれている。意味は役所に米を請求した内容と考えられる。裏面は意味がとれないが、人名の可能性も検討しなければならない。両面とも字面が小刀で削られ、墨が部分的に薄くなっている。

60は左半分が折れていると考えられるもので、下端中央が突出して欠けていることから題箋になるとを考えられる。文字は「金銀帳×」と読み、金銀の出納帳に付けられていたものと思われる。表面はきれいに削ってあるが裏面は裂いたままであることから、剝がれている可能性も考えられる。

75は2面に墨痕があり、木簡を削ったものである。箸かとも考えられるが、先が細くなる形態で先端は断面長方形に薄くなり、串など別の用途も考えられる。83は木簡の断片で細く削ったのみで側面加工はされていない。

人形 63は出土時にバラバラになったが元は完形であったものであろう。墨で頭髪と顔の表現が描かれている。

70は横向きの人形と考えられるもので、出土した2点が接合した。目から鼻にかけて墨痕があることから、木簡を転用して製作したものであることがわかる。製作工程は、まず割付けの横線を3本引き、これによって目、鼻下、頬の位置を決め、鼻下と頬の部分は厚みに直行して三角形に切り込む。目の部分は角を三角に切り欠き、鳥帽子の表現を切り取る。この後厚みの半分に削いで、残りの裏面の目を三角に切り欠いている。

簀串 64~66は簀串である。61は完形品でC II形式、62はC IV形式、63は完形品でC I形式⁽⁶⁾のものである。

箸 75~79は箸である。76・77は完形品で長さは22cmと23cmある。

その他 61は長方形に切り取ったものである。59と同様の形態であるが用途は不明である。

62は長さ6.5cmほどのプロペラ状の木製品で中央部に穴が二個あけられている。平城宮で出土例のある木トンボかとも考えられるが、この削り方では舞い上がらないため、穴に糸を通して糸の撚りによって回して音をだす道具の可能性が考えられる。

67は匙状の木製品で先端部ほど薄くなっている。68は釘であろう。70は円盤に直径7mmほどの穴が開いており、紡輪と考えられる。72は刀子の先を図中下方に差し込むことによって切り取った棒状品である。73・92は完成品で丁寧な削りによって整形しているものであるが、用途は不明である。

74は舟の破片で底はない。全体に丁寧な造りである。長岡京ではこれまでに左京域で5例出土しているが、右京域では初めてである。⁽⁷⁾

80~82は板状ないし棒状の木製品である。84~89は幅8~10mmで厚さ4mm前後の規格性を持つ

た一群である。他にも多く出土している。先端は圭頭状に尖らせるものと直線的なものの二種ある。長さは86~89が完存しているもので、圭頭は28cmほど、平頭は22~23cmの規格の別があるのかも知れない。全体に丁寧に造られているが、用途ならびに類例については不明である。

91は厚手の板材の側面に2ヶ所切り込みがあるもので、火切り板に形状が似ている。しかし使用痕がないため断定できない。

図版7・119は長さ11.3cm、幅1.1~1.3cm、厚さ2mm弱の小型品である。何かのミニチュアと思われる。

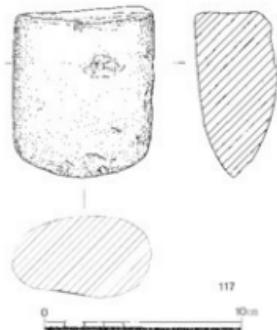
他に図示していないが、凝灰岩の切り石が3片出土している。2片はAの堆積から出土したもので、12cm角ほどの破片である。いずれも三面生きており、そのうちの1面は強い焼成を受けている。ほかはCの堆積から出土しているもので、幅20cm厚さ15cmの材で両端が割れていて20cm残存していた。生きている面の内1面が焼成を受けて黒変している。

(2) 流路堆積出土遺物 (第12・13図)

長岡京期の下層は全面流路によって堆積した層からなっている。1トレンチは断割りによって、2トレンチは掘り下げと断割りによってその埋没時期を究明した。遺物は流れによって堆積した砂礫層から主に出土し、量的には少ないが、さほどローリングを受けていない破片が多く、そのほとんどが縄文土器である。第12図中、93・94・100・101・104・105・109・114・115が1トレンチで出土したもので、それ以外は2トレンチ出土である。

縄文土器は中期から晩期にかけての土器が出土している。なかでも生駒山西麓産の胎土をもつものに94・95・99・102・104・110・113・114がある。98~101は晩期・船橋式の口縁部である。105・116は滋賀里IIIb式の土器で、116体部を削った後肩部に沈線を施し、沈線に沿って波状口縁の頂部をつないで二列の刺突を巡らしている。後期のものでは111・112・115が中津式、107が北白川上層I式で、ほかに102~104・110・113・114も後期の土器である。中期では106・108・109が船元III式の土器である。他にサヌカイト剝片も数点出土している。

縄文時代以外では93・96が挙げられる。93は上げ底の底部をもつ壺で体部外面は横方向の磨きによって調整され、体部最大径には穴があけられている。古墳時代にはいるものであろう。96は弥生時代の土器である。石器では第13図117の大型蛤刃石斧が2トレンチで出土している。図版8・120は1トレンチから出土した木製品で、厚さ1.2~2cm幅24.6cmで、長さは44cm前後になる。表面は側縁を残して皿状に窪み、裏は緩やかな曲面に削られている。鉄製工具で削られていることと、横で93の土器



第13図 出土石斧実測図 (1/3)

が出土していることからこの時代のものと考えられる。

5 まとめ

今回の調査では以上述べたように、長岡京期の溝と古墳時代ころに流れていると考えられる自然流路堆積を確認し、大量の遺物を検出できた。

ここでは若干のまとめをして今後の調査の資料としたい。

(1) 長岡京跡について

調査地は右京六条二坊七町内にあたり、その位置は第14図のようになる。西一坊第一小路はまだ未検出であるため、検出されている東一坊第一小路を朱雀大路心で反転したものである。これをみると検出された S D41001は七町域のほぼ宅地中央に掘られていることになる。この溝は宅地分割の溝と考えることができよう。検出遺構で述べたように S D41001と S D41005とは埋土や深さが異なっており、同時期に存在したとは考えにくい。むしろ最初に宅地の境溝として S D41001が掘られ、後に水量を多く流す必要性が起きたために、本格的な水路として S D41005を開削したのであろう。S D41005は粘質土と砂層が入り交じて堆積していることから周期的にかなりの水量があったことがわかる。旧河道上という立地から軟弱な地盤であり、護岸施設を後に施したものこれも水量によって一部流されている。

このような2本の南北溝の周辺は、東は緩斜面となって低くなり、東西方向の小溝群が掘られている。このような小溝群を耕作に伴う痕跡とする見解があるが、少なくとも居住に適する地盤ではない。一方西側は東よりは安定した地盤であるが、柱穴の1つも検出されておらず、牛の足跡が残っていることからやはり居住には適していないと思われる。この足跡には S D41001のベース上層に薄く堆積していた砂と同質の砂が入っており、長岡京期と考えられるが、古くなる可能性も残る。

検出された遺構に関しては以上のような状況であるが、S D41005から出土した遺物は多くのことを物語っている。これらの遺物はすぐ近くの上流から投棄されたものであろう。中にここで投棄したようなまとまりもあることを考えると、投棄場所は七町内の北方30m程の範囲に限定できよう。木製品が多く残っていたことにより、これまで土器でしかつかめなかった当時



第14図 右京六条二坊七町と調査地

の日常をより具体的に感じることができる。しかし類例の希少なものもあり、検討課題が残ったものも多い。木簡はいずれも二次的に加工されたものであるため当地に役所が存在したことの証拠にはならないが、木脊や石鈎の出土は役人の存在を裏付けている。硯が転用硯のみであることからも北方が役人の居宅である可能性は高い。

(2) 開田遺跡について

今回検出されたのは古墳時代に流れていたと考えられる流路堆積からであるが、中から縄文土器が多く出土した。開田遺跡ではこれまで明確な縄文遺構ないし遺物は見つかっていない。わずかに右京第297次調査で土器とサヌカイト剝片が出土していたのみであった。以前にも検討したように⁽⁸⁾、犬川に合流する旧和泉殿川が当地西隣りを流れしており、この上流域である調査地西500mには十三遺跡が所在している。⁽⁹⁾十三遺跡は右京第203次調査と右京第344次調査⁽¹⁰⁾で流路堆積より中期から晩期の土器が出土しているもので、今回出土した土器と同じ時期である。特に右京第344次調査の出土状況は同じく古墳時代頃の流路跡からの出土であり、2トレンチ・S D 41009を一時期とする流路が右京第344次調査地点の方から延びてくる可能性が考えられる。今後の資料の増加を待って再度検討したい。

注1) 日下雅義「長岡市域地形分類図」『長岡市史 資料編一付図』 1991年

2) 近年条坊復原の修正が向日市・山中草氏から提起されているが、まだ行政的な合意が得られないため、従来の呼称で記す。

3) 中島皆夫「右京第364次調査概要」『長岡市報告書』第28冊 1991年

4) 木村泰彦「右京第385次調査概要」『長岡市報告書』第29冊 1992年

5) 西市の推定地は2説ある。従来は五条大路と西二坊大路の交差点周辺に考えられていたが、近年六条大路と西一坊大路交差点周辺も木簡、墨書き土器の出土により注目されてきた。しかし、確実な根拠はまだ確認されていない。

6) 奈良国立文化財研究所「木器集成図録 近畿・古代編」1985年

7) 向日市域で1点と京都市域で4点出土している。

8) 小田桐淳「縄文時代」『長岡市史 資料編一付図』 1991年

9) 木村泰彦「右京第203次調査概報」『長岡市センターニュース』昭和60年度 1985年

10) 小田桐淳「右京第344次調査概報」『長岡市センターニュース』平成元年度 1989年

第2章 長岡京跡右京第413次（7ANMSI-12地区）調査概要 ——長岡京跡右京六条二坊六町・開田遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は1992年11月17日から同年12月28日まで長岡京市開田四丁目405において実施した長岡京跡右京六条二坊六町・開田遺跡の発掘調査に関するもので、調査面積は280m²である。
- 2 本調査は、長岡京の西市および中世の開田遺跡に関する資料を得ることを目的に実施したものである。当所では、1990年から毎年引き続いて実施しており、本年で3年目である。
- 3 調査は、平成4年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、原秀樹が担当した。
- 4 調査実施にあたっては、土地所有者である藤井博一氏をはじめ、水道の借用をお願いした前川石一氏、小田佐一郎氏など周辺の土地所有者、近隣住民の方々に種々のご協力を得た。
- 5 調査後の図面整理は、橋田邦夫をはじめ多くの方々の協力を得た。⁽¹⁾なお、本年度は遺構についてのみ報告し、遺物は次年度以降にまとめて報告する。
- 6 本報告の執筆および編集は原が行った。



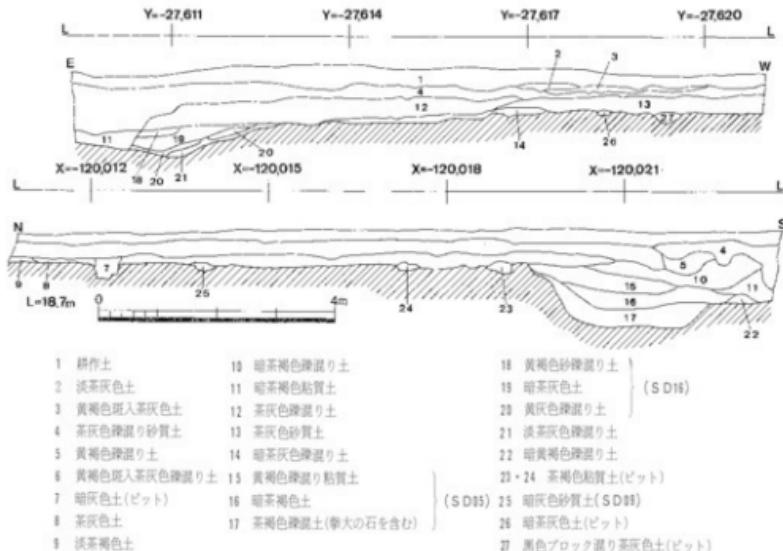
第15図 発掘調査位置図 (1/5000)

20 調査経過

2 調査経過

本調査地は、阪急長岡天神駅の南東約500mに位置している。地形的には、犬川右岸の氾濫原にあたり、緩やかに南東方向へ傾斜している。付近の標高は18~19mである。既に本調査地周辺では、1990年の右京第364次調査、1991年の同第385次調査と毎年継続して国庫補助事業による発掘調査を行っており、本年で3回目となる。これまでの調査では、長岡京期では西二坊々間小路西側溝と六条二坊六町内から掘立柱建物、井戸、土壙を検出している。しかしながら、西市に関する資料はまだ得られていない。この他に、奈良時代、古墳時代の遺構を検出している。周辺では、両時期の遺構はまだ多く確認されておらず、その分布は希薄である。これは弥生時代の遺物についても同様である。反対に、周辺の調査で数多く検出されているのは中世の井戸である。特に本調査地の地区名となっている旧小字澤井とその南隣の清水ヶ口は、文字どおり水に由来する地名であり、本遺跡における中世村落の消長を考えるうえで重要な視点となるものである。

今回の調査地は、1990年の右京第364次調査地で検出した遺構の広がりを確認するために、前のトレンチの南端を重ねて設定した。途中、遺構確認のために部分的に拡張を行った。調査は、例年どおり芋畑の収穫を待って、小型重機による掘削を開始し、調査終了後は再び元の畠地に埋め戻しを行った。



第16図 調査地南壁・東壁土層図 (1/100)

3 検出遺構

本調査地の基本層位は、おおむね耕作土以下、茶灰色～褐色を呈する粘質土が地山面まで約40cmほど堆積している。この間の層には部分的に1～5cm程度の小礫を含むものや、黄褐色粘質土が斑状に混じる層が見られる。地山は、黄褐色を呈するすこぶる堅い砂礫であり、一部表面には黒褐～茶褐色を呈するマンガン斑が沈澱している。なお、北側から延びる自然流路S D36411については、マンガン斑の集積層と判断された。遺構は地山面で検出している。

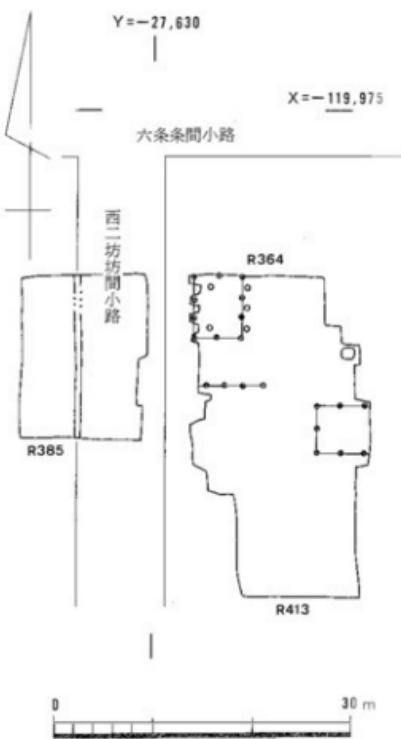
今回の調査では、長岡京期の掘立柱建物1棟と、鎌倉・南北朝期および戦国期の掘立柱建物、礎石建物、櫓状建物、井戸、土壙、溝、堀などを検出した。また、これらの遺構内から若干の弥生時代の土器と石器が出土している。遺構の大半は中世の柱穴や溝で、特に前者についてはかなり重複するものが多い。検出遺構図では、北から連続する第364次調査地との境目を一点破線で示している。

(1) 長岡京期の遺構

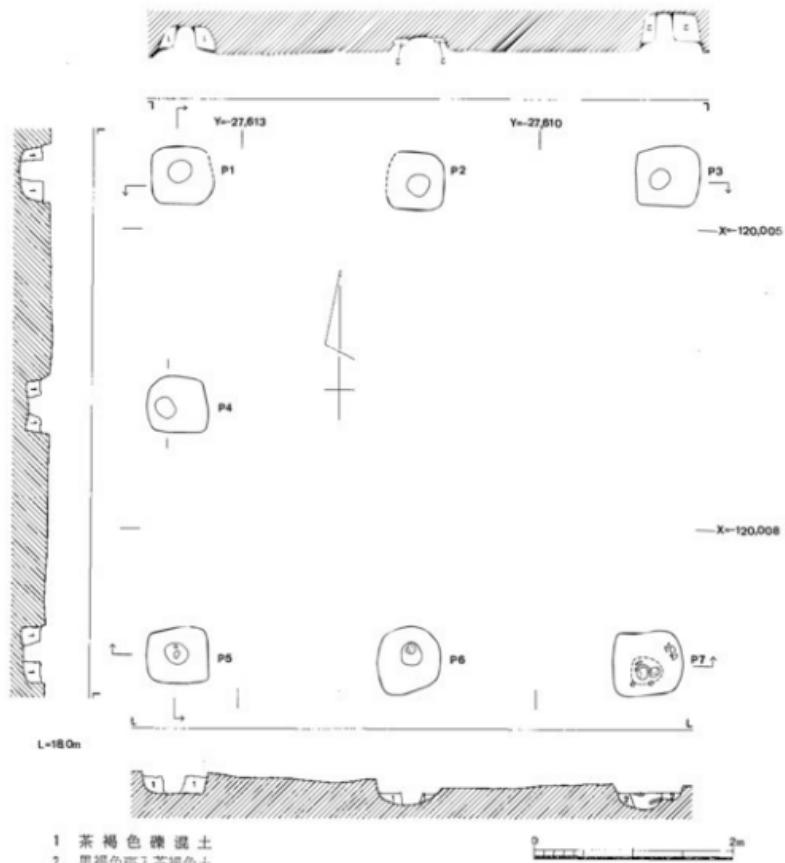
掘立柱建物 S B 4 1 3 1 8 (第17・18図、図版11-1) 2間×2間以上の東西棟であるが、東側柱筋については確認できなかった。柱間寸法は、梁行、桁行とも2.4mである。柱掘形は一辺0.6～0.7mの隅円方形を呈し、深さは0.15～0.4mである。柱穴内からは、土師器、須恵器の小片が出土した程度であるが、P7の柱痕跡には石や土器片が投棄された状況が認められた。本調査地内では、この他に長岡京期の遺構は未検出である。なお、西二坊々間小路をはさんだ右京六条二坊六町および十一町において検出した遺構は、掘立柱建物2棟、井戸1基、柵1列である。

(2) 中世の遺構

中世の遺構は、鎌倉・南北朝期と戦国期の2時期に大別される。しかし、今回の調査地では全体的に遺物が少ないうえに小片であること、また多数の柱穴と溝、土壙が重複しており、特



第17図 長岡京期検出遺構図 (1/600)

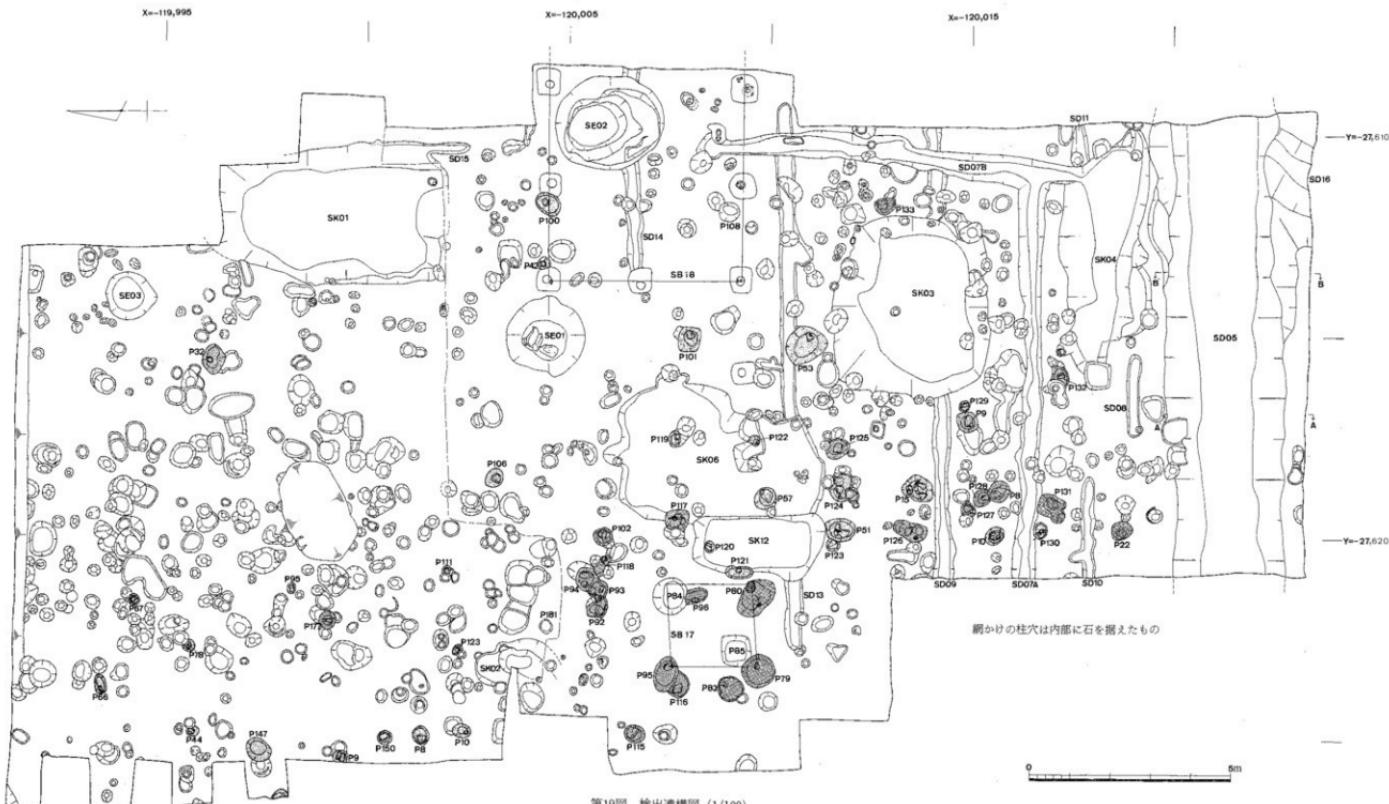


第18図 掘立柱建物S B41318実測図 (1/60)

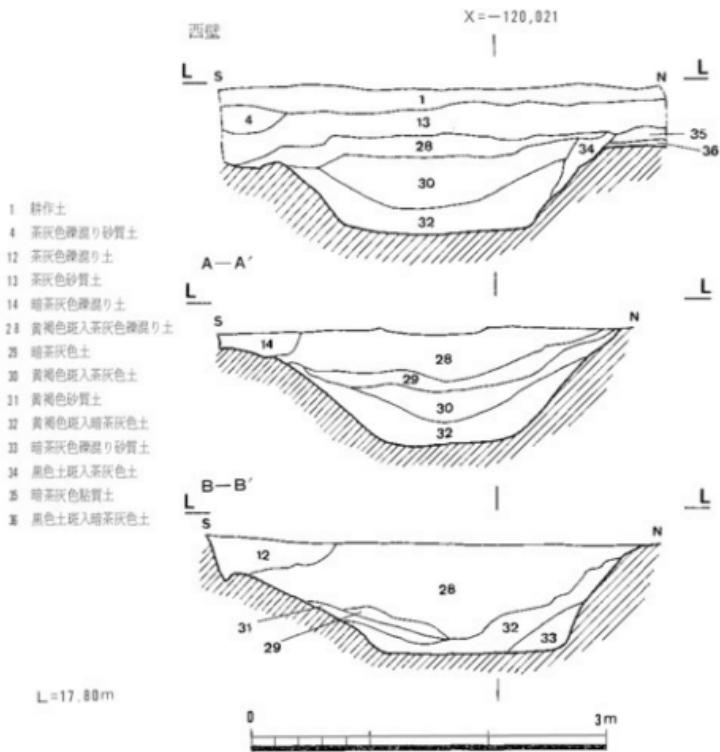
に建物の復原についてはさらに検討が必要である。いずれにしても、このように遺構が密集する状況は両時期ともに中心的な地域であったことを物語るものである。なお、遺構の年代観については鎌倉・南北朝期としたものは14世紀前半を中心とする時期、戦国期は16世紀前半を中心とする時期と考えている。

中世の遺構には、堀、井戸、土壙、溝、樋状建物、掘立柱建物、礎石建物がある。

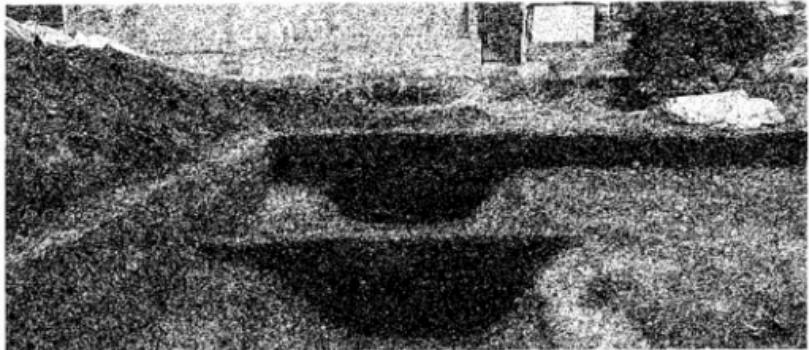
堀 S D 4 1 3 0 5 (第20・21図、図版11-2) 調査地南端で検出した東西方向の空堀。底の埋土には流水や滯水の痕跡は認められない。幅は約3m、深さは1mである。堀の断面形は、底に平坦面をもつ逆台形を呈する。これまで開田遺跡では同様の堀は見つかっておらず、初めての



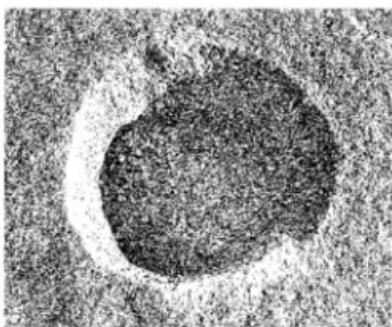
第19図 検出構造図 (1/100)



第20図 堀 S D41305土層図 (1/50)



第21図 堀 S D41305の断面（東から、西壁とA-A' ライン）

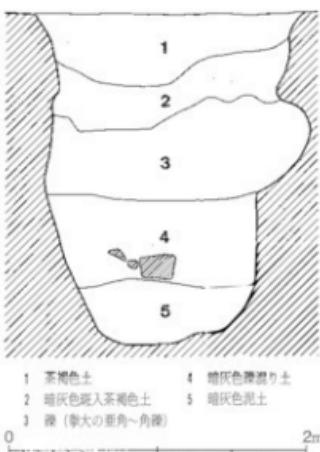
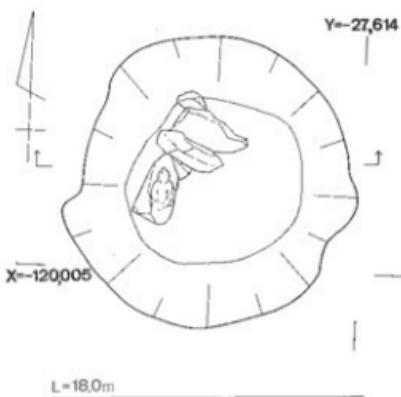


第22図 井戸SE41301（北から）

発見である。土壌については地表面はもとより、堀北側にもその痕跡は確認されていない。また、堀の埋土にも土壌の崩落を示す状況は見られなかった。なお、斜め方向の溝S D 41316と堀の切り合い関係は堀のほうが新しい。遺物は、土師器皿、瓦器風炉、瀬戸焼灰釉丸皿・平碗、備前焼と信楽焼のすり鉢の他に、火縄銃の火鍼が出土している。火鍼は堀を埋める土から出土したものである。戦国期に比定される。

井戸SE41301 (第22・23図) 直径1.9m、深さ2.2mの素掘り井戸。埋土は5層に分層される。このうち第3層には、こぶし大程度の石が隙間なく詰まっており、これを除去した第4層からは花崗岩製の石仏1体と赤色を呈するチャートが出土している。調査時の涌水は、ほぼ石仏がかぶる位までみられた。遺物は第3～4層に集中しており、土師器皿、備前焼と信楽焼のすり鉢、瀬戸焼灰釉丸皿・平碗、瓦器風炉・鉢、白磁皿などが出土している。戦国期に比定される。なお、本遺跡では右京第142次調査で石仏と五輪塔の火輪部を転用した井戸SE41403が検出されている。

井戸SE41302 長辺1.6m、短辺1.4mの長円形を呈する素掘り井戸。深さは2.9mである。掘形の南側には約1m下がったところにわずかな平坦面があり、ここから底まで一気に落ち込んでいる。また、底から竹の小片が出土しており、井戸を埋める際の儀礼に用いた可能性があ



第23図 井戸SE41301実測図 (1/40)

る。調査時は常に涌水がみられた。遺物は、土師器皿、瓦器塊・羽釜、常滑焼甕、青磁碗、鉄釉壺などが出土している。鎌倉・南北朝期に比定される。

土壙 SK41303 東西4.5m、南北4.0mの隅円方形を呈する土壙。深さ約0.2mの浅いすり鉢状になっている。土師器皿、瓦器塊・羽釜、須恵器鉢など、鎌倉・南北朝期の遺物が出土している。

土壙 SK41304 (第25図) 南北約2m、東西約6mの長円形を呈し、深さ約0.2mである。北東隅では溝SD41307Bとつながっており、溝SD41311は本土壙より古いものである。検出された石については、底から浮いた状態であり、面をそろえた形跡も認められなかった。

土壙 SK41306 (図版12-1) 南北約5m、東西2.5~3.5mの一部東に張り出しをもつ土壙。深さは約0.2mである。埋土は一様でなく、輪郭を見定めるのに難済した。土壙SK41312と石を据えた柱穴は重複関係から、本遺構より新しいものである。鎌倉・南北朝期に比定される。

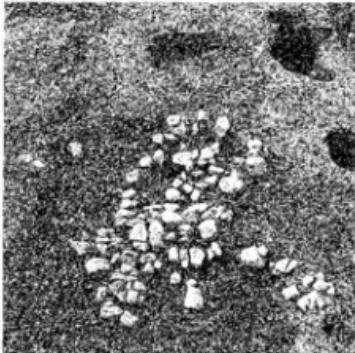
土壙 SK41312 (第24図・図版12-1) 長辺3.2m、短辺1.4mのいびつな長方形を呈する。土壙内からはモザイク状に赤く焼けた土の塊がまとまって検出された。いずれも一握り程度の大きさのものばかりであり、内部には植物質の痕跡を残す破片もみられた。土壙自体は直接火を受けておらず、後に投棄されたものと考えられる。本地点と北側の調査地では、この他にも焼土痕跡が発見されているが、その性格については今のところ明確でない。遺物は、土師器皿、瓦器塊、磁石などが出土しており、鎌倉・南北朝期に比定される。

溝 SD41307A・B 調査地南部を東西方向に延びるAの溝と、直角に交差して南北に延びるBの溝がある。溝幅は0.5~0.7m、深さは0.1~0.2mである。遺物は土師器皿、青磁皿などが出土している。戦国期に比定される。

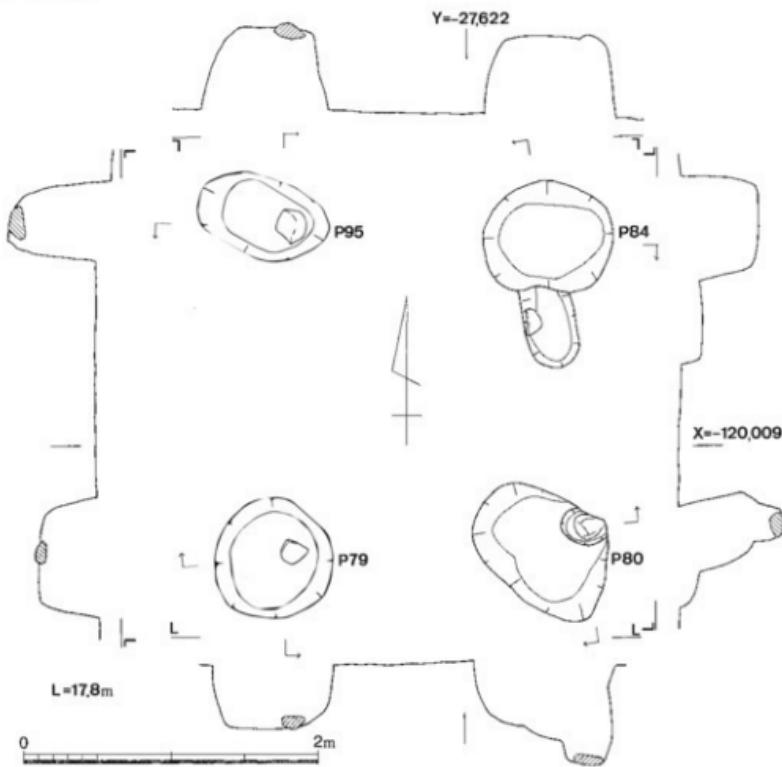
溝 SD41308~11・13・14 東西方向に延びるこれら一連の溝は、重複関係から他の溝や土壙、井戸に先行するものである。おそらく鎌倉・南北朝期のものと考えられる。



第24図 土壙SK41312 (北東から)



第25図 土壙SK41304 (東から)



第26図 構状建物S B 41317実測図 (1/40)

構状建物S B 41317 (第26図、図版12) 四角に並ぶ大型の円形柱穴を4個検出した。柱穴の形状は円形から長円形を呈しており、直径は0.7~1.0m、深さは0.5~0.7mである。相互の柱間寸法は2~2.1mである。4個の柱穴のうちP79・P80・P95の底には石を据えている。他の柱穴に比べてこれらの柱穴は格段に大きな掘形であり、高所から周辺を見渡す建物にふさわしい基礎地業であると思われる。

その他の柱穴 本地点と北側の右京第364次調査地では、およそ500余りの柱穴を検出した。各柱穴の時期については、これまでの調査成果から鎌倉・南北朝期と戦国期に属するものと考えられる。中でも掘形内に石を据えた礎石柱穴は調査地西側を中心に55個確認しており、柱筋もほぼ南北方向に揃う傾向がみられる。石はすべて掘形内で確認しており、その有無は検出時にはわからなかった。この種の柱穴は重複関係から戦国期に比定される。柱穴の規模はいずれも直径0.3~0.5m、深さ0.3m前後のものが多い。

4 ま と め

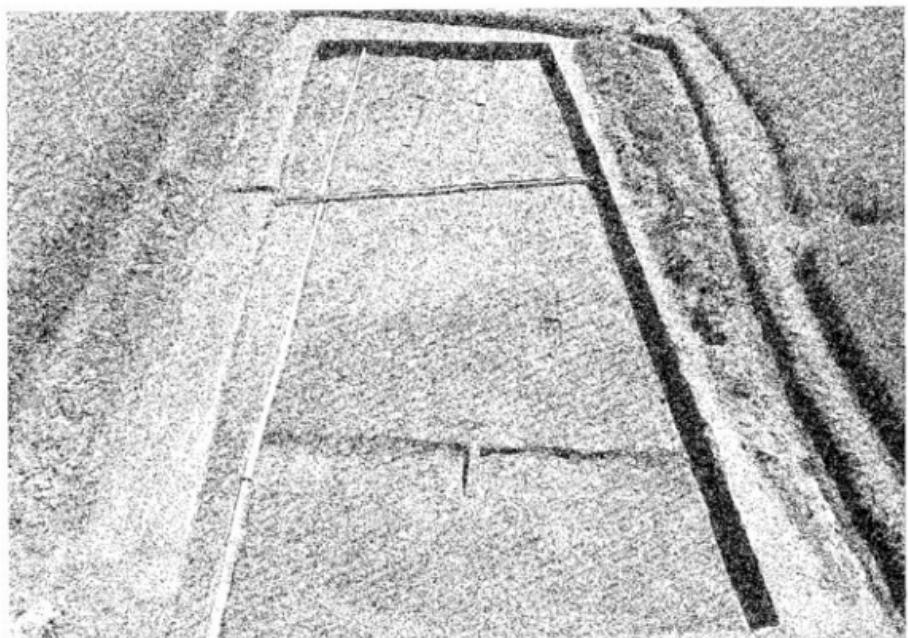
今回の調査では、長岡京期の掘立柱建物以外はほとんどが中世の遺構である。この他には、弥生時代中期の土器と石器、江戸時代前期の染付や土人形がわずかに出土した程度であった。また、遺物の出土量はこれまでの調査に比べるとかなり少ないものである。遺構では、特に戦国期において新しい成果を得ることができた。

中世の遺構、遺物が重複する本遺跡において、戦国期を象徴する遺構として注目されるのは、堀、櫓状建物と礎石建物であり、遺物では井戸に投げ込まれた石仏と火鉢の出土である。このうち堀については、地名や地表面からその痕跡をたどることは困難であるが、西側では右京第385次調査の南北方向の溝S D38501とつながるものと考えられる。東側については、中間で北に折れる溝S D41307Bに区画されるが、東限は犬川の後背低地との地形変換線に求められる。おそらく東側についても、堀や柵で区画されたと想定される。これまでの調査では、堀南側からも戦国期の井戸や柱穴を検出しているが、地形的に安定する北側ではこれを上回る密度で多くの遺構が集中している。これは遺跡の中心部に近いことを物語るものである。土壘については、少なくとも堀北側には存在しないと考えられ、柵などで区画された可能性が高い。櫓状建物については、高所から周辺を見渡す物見櫓を想定している。4個の柱穴は他に比べて大型で深い掘形を有しており、底には3ヵ所に石を据えている。このように平坦な地面に建つ櫓は、やや簡易的な施設、堅固さに劣る印象を与えるが、これは反対に本遺跡の特徴を物語るものである。これに関連して注目されるのは、石を据えた礎石柱穴が多い点である。それぞれの石には若干の高低差がみられるが、いずれも平らな面を上にして据えたものである。これについては典型的な寺社建築の礎石と異なり、機能的に柱の長さの調節や沈下を防ぐための礎盤と同じ要素が強く同列には扱えないとする見方もある。中世城郭における礎石建物については、強力で安定した戦国大名の恒久的な施設として出現しており、特に織田系城郭といわれる城は、⁽⁷⁾ 柄形の虎口、礎石建物、瓦葺き、石垣など共通する特徴を有している。乙訓地域では勝龍寺城⁽⁸⁾ がこれにあたる。本遺跡は時代的にややさかのぼるが、堀と溝で区画された中に礎石柱穴が集中する状況は他に比べて際立つ特徴であり、同様の例は江戸時代の地名に「やしき」と呼ばれた一画が判明した今里遺跡でも確認している。⁽⁹⁾ まだ乙訓地域での事例は少ないが、今後戦国期の居館や城館の調査が進めば類例は増加するであろう。いずれにしても、これらの礎石建物は戦国期の土豪・国人が領主権力を誇示した象徴的な存在として評価される。今後は他地域の事例を含めた検討を行いたい。また、本遺跡では櫓状建物の柱穴に礎石と掘立柱を併用する例がみられる。一般的に、中世の建物については柱間寸法が不揃いになり、柱筋がすべて揃わない点から復原は難しいが、このようなケースは当時の建物普請の実態を示唆するものとして注目される。

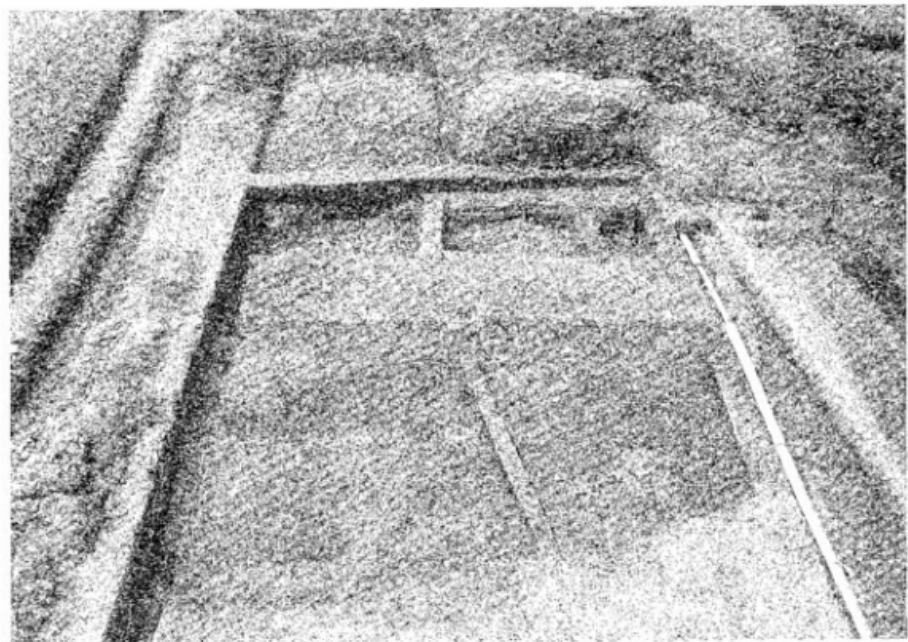
これまで開田遺跡は、文字どおり旧小字澤井に関連する中世の井戸が検出される遺跡として周知されていた。しかし、一連の発掘調査より中世遺構の中心部は、本調査地以北に展開することが想定できるようになった。中世村落については、文献史料に村名が記された所でも、地名や地籍図からその位置が想定できるものは少なく、各村落の変遷は一様でなかったと考えられる。本例は、反対に発掘調査から埋もれた中世村落が判明した事例である。しかし、今回新たな問題として提起された点は戦国期の評価についてである。これについては、江戸時代の村⁽¹⁰⁾絵図や地籍図、地名等の検討が必要であり、また他遺跡との比較、乙訓地域の土豪・国人の動向も密接に関連する問題として検討すべき課題が多い。これら多くの問題と各時代の総括については、遺物とともに最終年度に報告することにしたい。

- 注1) 図面整理は、主に池庄司淳・芳山亜里華の協力を得た。
- 2) 日下雅義・植村善博「自然環境」『長岡京市史』資料編一 1991年
 - 3) 中島皆夫「右京第364次調査概要」『長岡京市報告書』第27冊 1991年
 - 4) 木村泰彦「右京第385次調査概要」『長岡京市報告書』第29冊 1992年
 - 5) 原秀樹「鎌倉・室町・桃山時代」『長岡京市史』資料編一 1991年
 - 6) 木村泰彦「右京第142次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和58年度 1984年
 - 7) 中井均「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
 - 8) 岩崎誠他「勝龍寺城発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第6集 1991年
 - 9) 原秀樹「今里における中世村落の変遷 - 近年の発掘調査と地名調査から - 」
『長岡京古文化論叢II』中山修一先生喜寿記念事業会 1992年
 - 10) 長谷川太一氏蔵「山城国乙訓郡神足村微細絵図」宝暦13年(1763) 長岡京市指定文化財

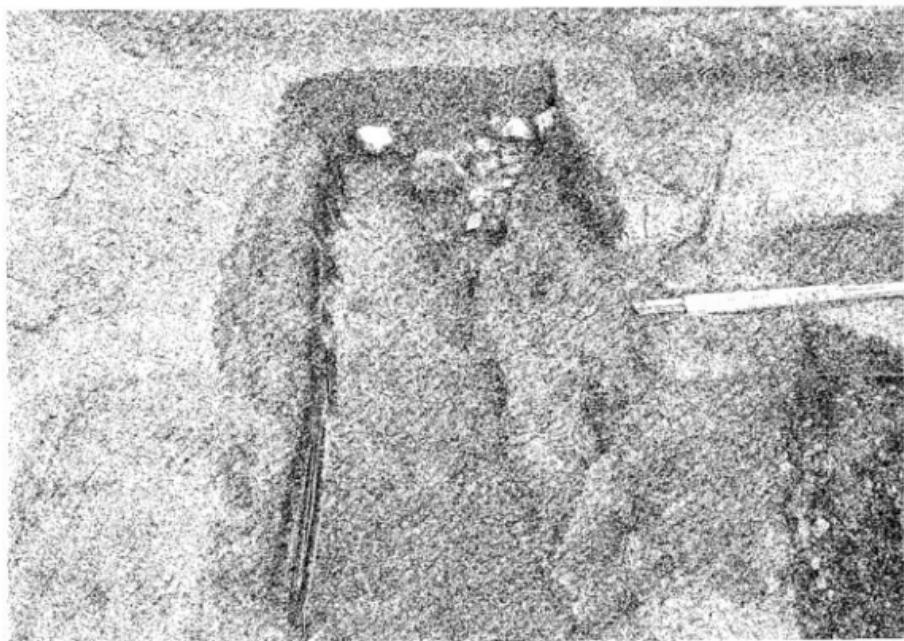
図 版



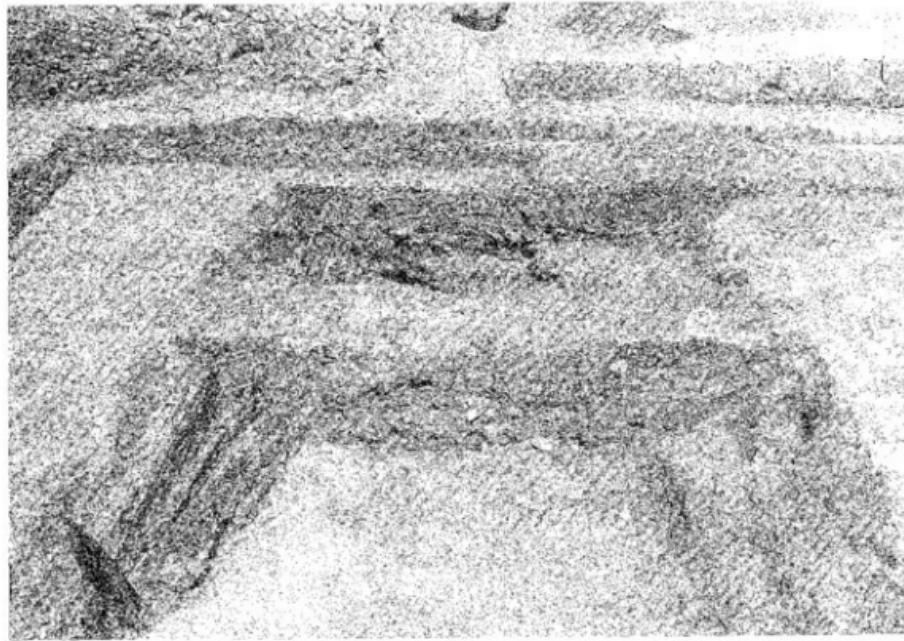
1 1トレンチ 長岡京期拡張前（西から）



2 1トレンチ 長岡京期拡張部（東から）



1 1トレンチ 溝S D41005 (南から)



2 1トレンチ 溝S D41005断面 (南から)



1 2トレンチ 全景（東から）



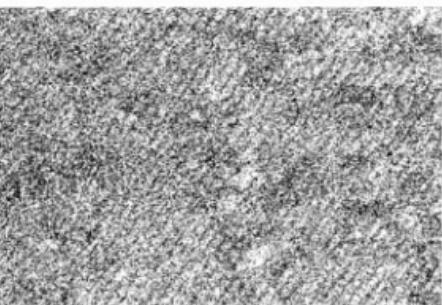
2 2トレンチ 自然流路 S D41009（西から）



4 1トレンチ 西拡張区の足跡（東から）



3 1トレンチ 断割り断面（北から）



5 足跡の検出状況（東から）



11



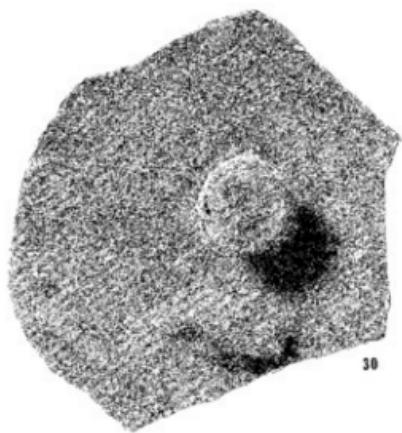
26



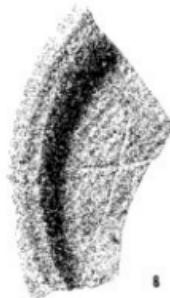
12



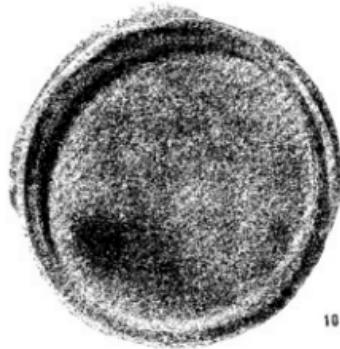
27



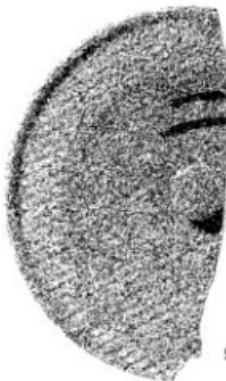
30



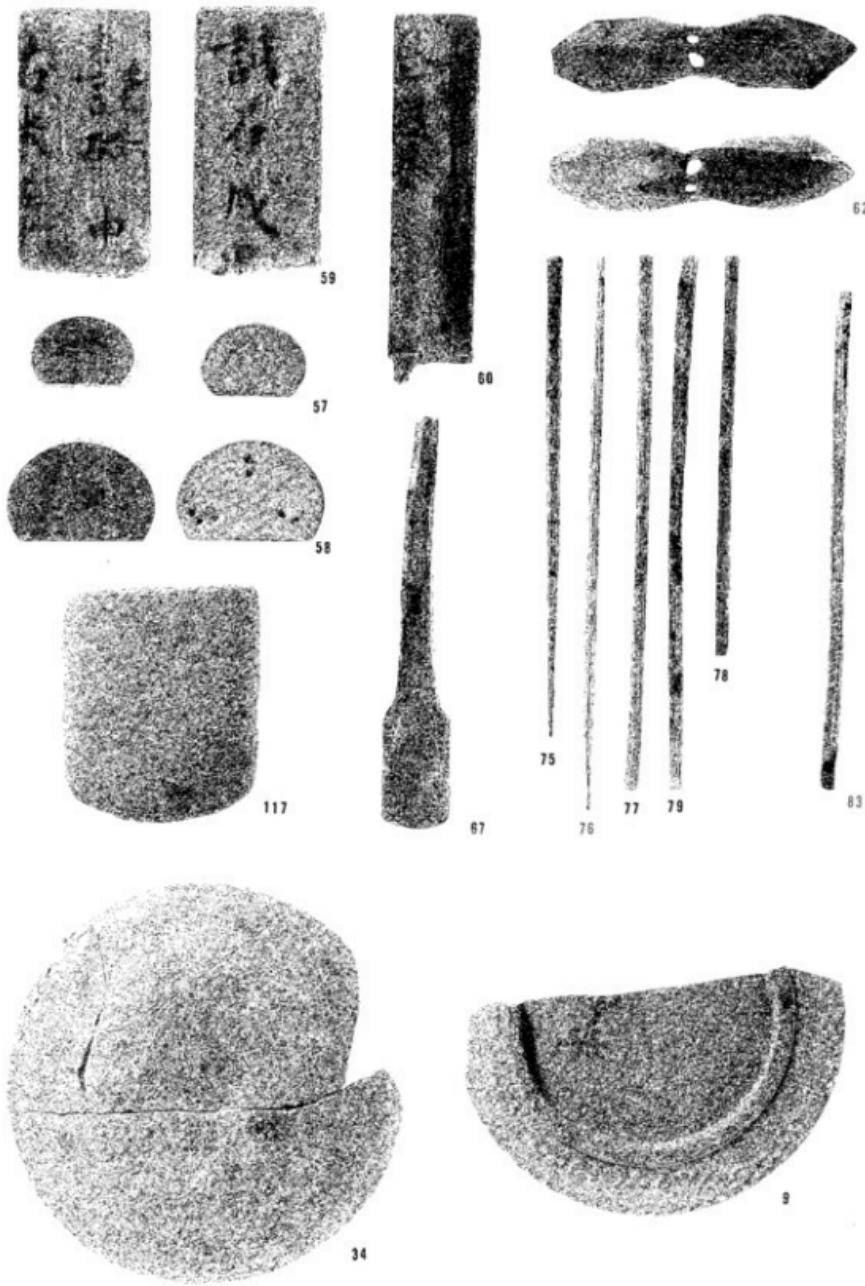
8



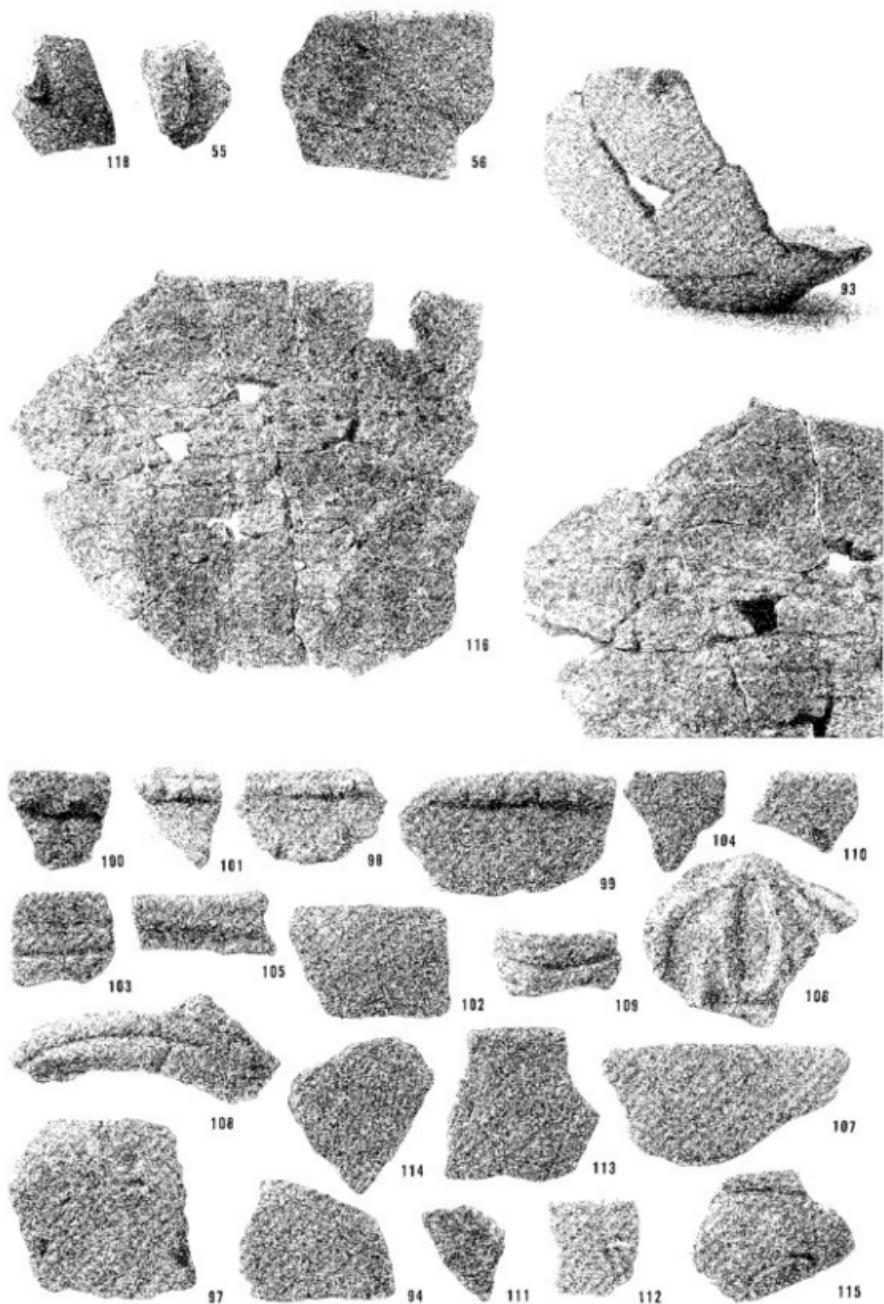
10

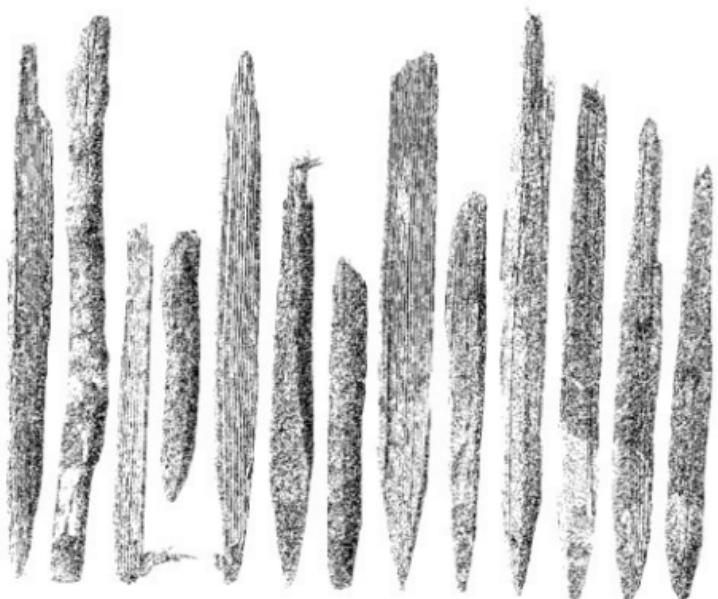
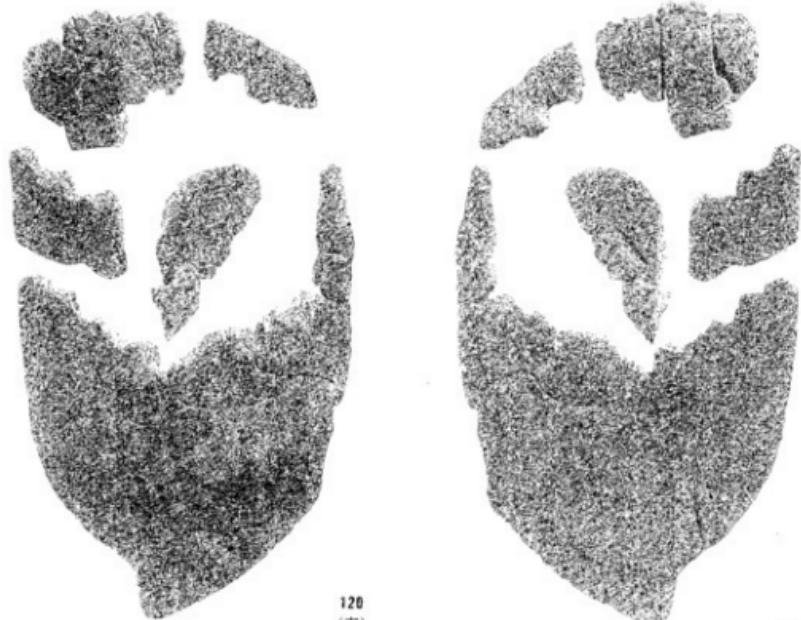


5



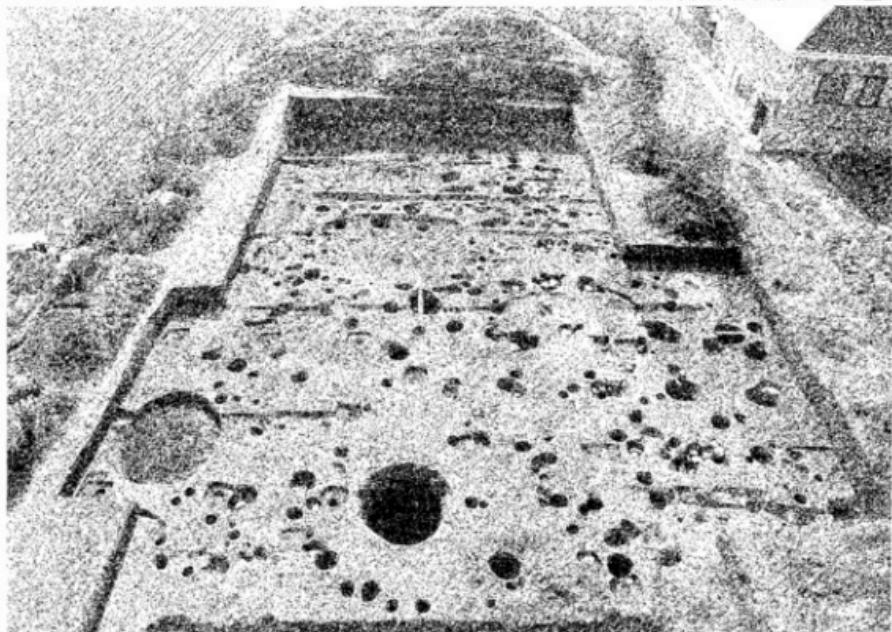








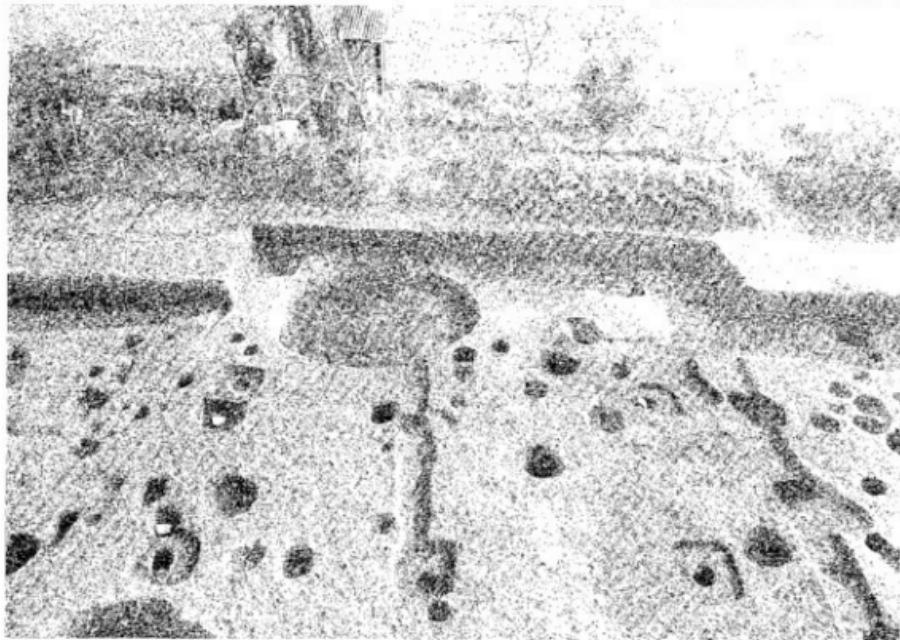
調査地全景（西から勝龍寺城方向を望む）



1 調査地全景（北から）



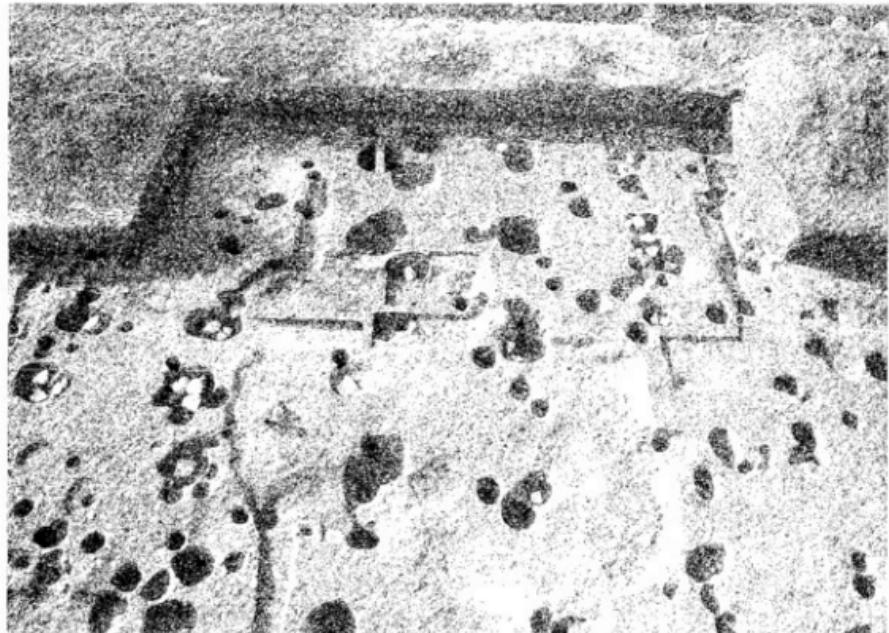
2 調査地全景（南から）



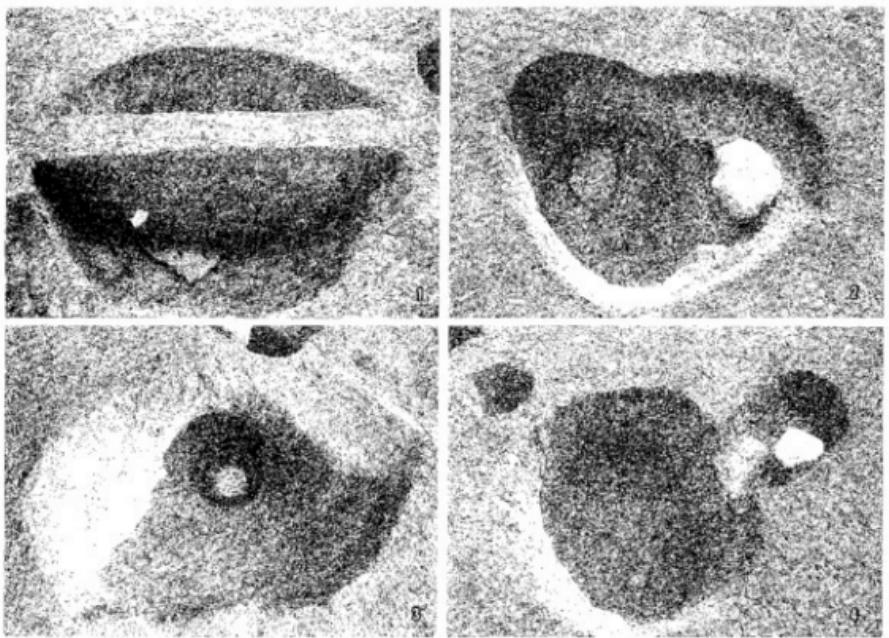
1 挖立柱建物 S B41318 (西から)



2 堀 S D41305 (西から)



1 檜状建物 S B41317ほか (東から)



2 檜状建物 S B41317の柱穴 (1-P79, 2-P95, 3-P80, 4-P84)

長岡京市文化財調査報告書 第31冊

発行日 平成5年3月31日

編集・発行 長岡京市教育委員会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121

印 刷 株式会社留青同朋舎

〒600 京都市下京区中堂寺鍵田町2

電話 075-361-9021～4 (代)